

権三 これを見て

何か塗り物の燃えさしが

トだんく出し、よく見て

こりやコレ位牌の蓮華座……ヤ、しかも覚えの恰好といひ、文字は焼失なしたれども、慥かにこれは取交せし、親人の。ムウ。

トこの時奥よりお辰出て来て

たつ 按摩さんく。

トこれにて権三、件の燃えさしを紙に包み、懐中する。

コレ、按摩さん、おいらんがね

ト囁く。

権三 ムウ。幸ひ忍んでこの様子

たつ サア、モシ、爰へ

ト下手の地袋戸棚へ権三を忍ばせる。直ぐに奥より善右衛門、件の白鞘を持ち、出て来り

善右 この得手物にて小紫、どうやら斯うやら釣り寄せたが、幸ひ爰は小紫が寝どころ。爰に待ち受け

日頃の本望有り難いわい。

トあたりには落ちてある薬包みを見附け

ハ、ア、こりやア先刻の薬包み、どうして爰に。

たつそれはおいらんがお上がりなさんして、その飲みさしを権三さんが

善右 ナニ、権三

たつ イエ、按摩さんが飲んだわいなア。

善右 すりや、権三といふ按摩が

たつ エ、知らぬわいなア。

ト奥へ入る。

善右 樋か間夫の権三とやら、按摩に化けて爰へ来たに違ひない。こりやア三勝半七に服ませるといつた縁切り薬。知らずに権三と小紫、これを服むとは、縁切らせるに手間隙いらす。

ト床の上へ上がる。バタ／＼になり、奥より小紫逃げて出る。跡より彌市、以前の形にて追ひかけ来り

彌市 そりやつれない小紫、わしが顔を一目見ると、其やうに逃げ廻るは、それ程までに、振り付ける

のか。

小紫 それぢやというて、どうマア顔が

彌市 合されぬとは、この彌市、見覚えあるか。

小紫 エ。

彌市 こなたの顔も、まだしみるく

ト小紫を捕へ、顔見ようとする。小紫顔を隠す。この時暮れ六つの鐘鳴る。

ありやもう暮れ六つ。南無三。

小紫 こゝ離して

ト手紙ゆゑ、荒く出来ぬ思ひ入れにて、振り切る。彌市また捕へやうとするはずみに、側なる肴鉢の中へ足を踏みかけ、鶏目の思ひ入れ。小紫これに目を附け、彌市はそこらを探る。下手の戸棚より櫃三、牛身出して様子を窺ふ。

まさしく鶏目か。

彌市 エ。

ト思ひ入れ。

小紫 それで仕合せ。

彌市 イヤ、何ともない、兩眼明らか。

ト上手の床の上にて、善右衛門、件の白鞘を出し、小紫に見せ

善右 エヘンく。

トこれにて小紫思ひ入れあつて

小紫 善右衛門さん。

彌市 ヤ、外に誰れやら。

小紫 イエ、誰れもるやせぬ。

ト善右衛門に目くばせして

わたしばかりでござんす。

彌市 すりや、爰には外に、誰れも居ぬこそ幸ひ、この彌市が云ふ事を一通り、聞いて下され、小紫どの

ト合ひ方になり、小紫の裾を捕へ、サツとなり

恥かしい事ながら、こなたをフツと見染めたは、土手の夜風の衣紋坂、突き出しとやら、目見得とやら、紫小袖に駕籠の内。此やうなお女郎が、又と一人あるものかと、見返るその夜は先月二十

日、戀の暗路もせふとくの、亥中の月の朧にも、こなたの顔が目先きへちらく。金さへあれば一夜でも、抱いて寝られる賣り物と、コレ、この通り澤山に、金の事をば花とやら、所持して逢ひに來ましたわいの。

ト此せりふの申程に、善右衛門無性に招く。小紫は、彌市が捕へある上着を脱ぎ捨て、思ひ入れあつて、善右衛門の床へ入り、屏風を立てる。彌市は矢張り小紫が居ると心得、側へ來り

コレ、小紫どのく。……ヤ、いつの間にも、上着を脱いで

トあたりを見て探る。この時權三は、鶏目と聞いて、そろりと出て、彌市の金に心をかける。彌市は權三を小紫と心得、裾を捕へて

そりやつれないぞや小紫どの、せめて一夜は

ト權三金を取らんとする。

ヤ、この金に手を掛くるは。そんなら得心か。

ト權三引つたり、逃げさうにする。彌市捕へるはずみに頭巾取れる。彌市、この頭を探りあてヤア、小紫と思ひの外、こりや盗人ぢやな。泥坊々々。

トわめく。これにて奥より、善好、甚兵衛、長吉、忠次郎、お倉出て來り

皆々 なんだ、泥坊だく。

彌市 わしが花を、取つて逃げようと思いました。

善好 なんだ、花を取つた。とんだ奴があるものだ。

忠次 雷様なら、臍を取る筈だが

甚兵 はなを取つたら、天狗様かも知れない。

皆々 お前の鼻は満足であります。

彌市 イヤ、金を取りましたく。

ト權三を無理に捕へる。この時權三、彌市の顔を見る。

甚兵 ヤア、泥坊だといつたは、先刻の按摩だな。

くら ほんに、それく、按摩ぢやく。

長吉 按摩が泥坊するとは、あんまり太い奴だ。

皆々 ぶちのめせく。

ト立ちかゝる。善好とめて

善好 カウくみんな、待ちねえく。斯う大勢で締めて、ぶちのめして、ひよつと疵でも付けて、懸

り合ひだ。よく糺して見るがい。

忠次 それく、善好の云ふ通り、見たところが随分立派な形だ。泥坊をしさうな風でもねえぜ。

長吉 黒羽二重に、丸の内に本の字の紋付きの小袖を着てる。それで泥坊するとは、まるでほんに氣

が付かねえ。

トこれを聞き、こなしあつて

彌市 丸に本の字の紋どころは覚えある。もしやその名は、助八とは云はぬか。

皆々 サア、われが名は何といふ。助八かく。

ト權三よき仕合せと頷づく。

忠次 頷づくからは、いよく此奴は、助八といふ奴だな。

彌市 助八なれば身が弟、ヤイ

ト權三を助八と心得、襟髪を引きつけ

こゝな人でなしめが。いつぞやも身が留守へ参り、ようも小袖を奪ひ取り、それをおのれは着てをるな。兄の面まで穢させる大泥坊め。以後の見せしめ。

トあたりにある平の蓋を探り取り、無性にくらはせる。これにて權三の額に疵つくこと。

甚兵 兄の物まで泥坊するとは、太い奴だ。按摩をして、方々枕探しをしやアがるのだらう。ドレ、面

を
ト権三の襟髪を掴み、顔を見て

ヤア、わりやアこの間廣徳寺前で、勝山さんの身拔の百兩を出した、慥かその名は、定助だなく

長吉 そんなら、その時の金も、どこぞで盗んで来たのだな。
権三 イヤ、全く盗みを渡世に致す者ではござらぬ。思案の外に迷ひ、行き詰つての若氣の至り。

立つ立たざるの譯ゆゑに、よんどころなく
彌市 ヤ、その聲は聞き馴れぬ

ト云ふを打消し

皆々 サア、盗んだ金を出しやアがれ。

ト権三の持つてゐる金を引出す。此はすみに包み解けて、みだけ小判、あたりへちらばる。

長吉 ヤア、この金は皆、銅脈だ。

皆々 ヤア、似せ金だ。

権三 誠にこれは

ト憐り。彌市思ひ入れ。

長吉 ハ、ア、いま兄弟だと云つたが、お客といつたこの兄も、似せ金遣ひの大騙りだな。

忠次 そんなら先刻貰つた金も

甚兵 みんな出して、改めるがい。

ト皆々貰つた金を出して、改めて見て

善好 そりやこそ、みな似せ金。

忠次 ほんに延喜の小判だ。オヤ。

くらコレ

ト彌市の胸ぐら捕へ

この人は、ようも、田舎の大盡と云つて、わしを騙してお客になつたの。みんなの手前、
茶屋が濟まぬ。濟まぬわいなう。

甚兵 弟は泥坊、兄は騙り、二人ながら、會所へ引摺つて行くがい。

皆々 それがい。

ト立ちかゝる。

權三 似せ金とは心付かず、さしかゝる難儀ゆゑ、ふとした事の出来心、盗みし金が銅脈とは。ホイ。
彌市 さう云ふ聲は弟にあらぬ、聲はよく似た若旦那。

權三 アイヤ、弟に相違ない。もう斯うなつてはどこまでも、身が實名を隠すに幸ひ。兄弟ぢやぞ。

彌市 心ある詞といひ、エ、コレ、かて、加へてこの病ひ、見えぬ鷄目の悲しさは

權三 サ、その眼病ゆる盗み心、それが仇なるこの場の仕儀。

くらいつその事に皆さん、ぶちのめすがよいわいなア。

皆々 しめろく。

ト皆々寄つて彌市、權三をしたゝかに打つ。これにて彌市の衣裳、頭巾ぬげて、紺看板の奴の形にな

そりやこそ騙りに違ひない。

トこの時、上手の屏風を明ける。中に小紫、善右衛門、よろしく思ひ入れあつて

善右 ハテ、油断のならぬ世界だなア。

小紫 お客は騙り、あちらのお人は枕探し、揃ひも揃ひしお二人さん

權三 ヤ、そちや小紫、最前からのこの場の仕儀を、屏風の中で聞いてるながら

小紫 知れた事、口出ししたら、盗人の同類になるわいなア。

權三 サ、盗み騙りと一筋に、聞いたら思ふも尤もぢやが、無ければならぬ金ゆゑに

小紫 それで人の物を盗むのかえ。無ければならぬ金ゆゑに、盗みをしやうものなれば、貧しい暮らしをする者は、浮世に一人もござんすまい。傾城に身を賣るのも、盗みがならぬ習はしゆる……コレ、外に何の金のいる

權三 ヤ。

小紫 この屏風で聞いてるれば、思案の外に迷ひ、行きつまつて金があると、隠すとすれどその口から、よもやと思へどたつた今。それで大概様子が知れた。

權三 イヤサ、あれは當座の嘘偽はり。

小紫 イヤ、偽りならぬその様子、何もかも知つてゐる。もう斯うなつたら云はにやならぬ。皆さんも聞いて下さんせ。

ト合ひ方になり

いま盗みした此お人は、以前わたしが大深間、命も共にと約束した仲、百兩で買はねばならぬ品

があるとして、わたしが身を苦界に沈め、その金で買ひ求め、身を立つるといふ仕儀ゆゑ、そこで斯うした勤め奉公。その金で、望みの品は買ひもせず、外の女を身請けして、傾城ぐるひの遊びの金。女郎になつた此わしは、ほんのお先に使はれもの。それも只の女子なら……云ふに云はれぬ切ない勤め、その辛抱も忠義と義理、姿を變へて……イヤサ、氣兼ね苦勞も皆無駄事。佛のやうな女子でも、腹が立たいでなんとせう。又その上に爰まで来て、小紫の間夫で候ふと、人の物まで盗み騙り。頼みの品も人手に渡し、堅い約束、義理までも、女にかへて忘るゝ程な、うつけ者にはもう構はぬ。これが縁切り、愛想つかし、男同士なら義絶とやら。盗み騙りを好きこのむ。そんな小さい魂ひの、男はフツク嫌ぢやわいなア。

權三 ムウ。様子知らねば一通りの、恨みは尤も、さりながら、最前逢うたその時に、話し遅れた女の身抜き。それには深い

小紫 譯があるなら云はしやんせ。

權三 サア、その譯は、どうもこの席では

小紫 云はれまい。なんとして、云はれた義理ぢやござんすまい。その心ゆる彼の品も、外手へ渡し剩つさへ、盗み心の見下げたお方。

彌市 心にもなき騙り事、絹屋の彌市と偽つて、客になりしも敵の行くへ、尋ねる爲に世間のとり沙汰槌かにそれとその人に、似たとあるゆる來て見ても、因果な病ひの鶏目にて、皆目見えぬゆるにこそ、この場の仕儀を何もかも、探り足なる間違ひだらけ。

小紫 似せ金の騙りの人、兄弟やら主従やら、皆馴合ひの拵へ事。ようもく此わしを、深い所へ……人に心は許されぬもの。

トあたりを見て

人の心と丁度この、活け花の菊の花。

ト以前の馬盟に活けし菊を前へ持つて出て

黄菊白菊その外の名はなくもがなと、二色に限る菊も、人の拵へやうにより、紫にもまた紅にも咲けど、ようしたもので、外の色は褪め易い。取分けて紫は、朱を奪ふの譬への通り、盗みする人に繋がれては、紫の名の穢れ。活けた器は、馬盟の畜生侍ひ……ほんに見ざめがするわいなア。

權三 花に准へ、器にかづけ、畜生の、仇花のと、譯を知らねば疑ひの、心に呼はるその悪口。色紫の濃い仲も、只一通りの譯ではない。様子とつくり聞かぬうち、その憤りは

小紫 聞くに及ばぬ、約束變替へ。

權三 ムウ。人目を思ふのその姿、女の格氣と思はせる、拵へ事と存じたに、いよく本心

小紫 この後義絶。

權三 然らば身共も是非がない。堅い固めと取交せし、親々のこの位牌。この場に於て元々へ

ト位牌を出し

サア、其方へ預けたる、身が親の位牌を返しやれ。

小紫 サア、その位牌は

權三 如何いたした。

小紫 エ。サア

トつかへる。

權三 あるまい。火中なしたな。

小紫 そんならそれを

權三 その燃えさしは、即ちこれに

ト件の燃えさしを出す。小紫、思ひ入れあつて

小紫 あつて益なき品ゆゑに

權三 そんならそれまで

小紫 焼き捨て、しまつたわいなア。

權三 ムウ。

ト立ちかゝる。

善好 何をしやアがる。

トかゝるを、腕を捻ぢあげ、見事に投げのけ

權三 ヤイ。エ、おのれはなア。

ト誂への合ひ方になり

最前よりいろくくと、明けて云はれぬこの場なれば、何申しても尤もと、餘所を憚り、料簡つけ
てゐる某、今といふ今、誠の心を見て悔り。假の色氣や浮氣でなく、眞實底から義絶の様子。現
在身共が親の位牌、焼き捨てたその心、もう此方も義理はない。義理を立つるも、世を忍ぶも、
この親々の位牌ゆゑ。たとへ心に憤り、腹立つ事があらうとも、様子を聞かぬ其うちに、一途の
怒りに義絶するは、かゝる性根と某も、今の今まで知らなんだわえ。諸人の舌頭誠と心得、預かり

し位牌を失ふのみか、聞いてゐられぬ今の悪口。其方の親のこの位牌も、義絶のしるし、この場にて、まッ斯うなして

ト刀を抜き、我が持ち来りし位牌を二つに切り

斯くなす上は互ひの親々、破却なしたるこの返報。

小紫 すりや目の前で現在の、親の位牌を

権三 切つて捨てたる上からは

小紫 義を結びたる縁も切れ

権三 親の位牌を焼失なせば、又も重なる敵も同然

小紫 我が親のその位牌、切つて捨てるは目前の、矢ッ張り敵

権三 互ひに親の

小紫 敵と

権三 敵

小紫 元へ戻れば

権三 義理も情も

兩人 これ限り。

トきつと詰めよる。

善右 ハテ、薬の効験は争はれぬ……イヤ、間夫を突き出す小紫、心底見えた上からは、この天國は望みの通り

小紫 そんならわたしに下さんすか。

権三 ナニ、天國とは

彌市 それが欲しさにお主の難儀

小紫 人の難儀が此方の腹癒せ、騙して苦界に沈めた代り、この天國は此方から

権三 うぬ、あくまで辛き

ト立ちかゝる。

善右 天國欲しがるその男、正しく彼れはお尋ね者、本庄助太夫が悴、笹野権三とやら。

彌市 アイヤ、その権三は鈴ヶ森にて、とうにお仕置き。

甚兵 そのお仕置きの槍疵も、急所をよけて助かつたとの風聞。権三を隠して今の名は、慥かに定助。

長吉 槍で突かれて助かつたゆゑ、それを異名に、槍の権三といふ噂。

忠次 權八とやらいふ者も、お仕置きその場から、繩ぬけして逃げたとやら。權三權八同名で、二人ながら大悪人。

善好 槍の權三に逃げ權八、廿四孝の三の口。

くら 但し向島の料理茶屋

善好 それは武藏屋權三の事よ。

善右 權三であらうが權八でも、浮世へ出られぬ日蔭者。盗み騙りは其奴ら二人、大方そこらであらうかい。

彌市 眼は見えねども最前から、詞の端々、正しく存命ありし御主人様。小紫どのといふは、この下郎めが八重梅様の、形見の召し物着せました時、繩切つて逃がしたる

小紫 その科人は權八とやら。それは男、わたしは女子。

權三 今更卑怯によき幸ひと、女の眞似でも致さずば、此方とても打割つて、云はゞ互ひに科ある身。……イヤモシ、科人になる時は、戀も敵も討たれぬ道理。

小紫 そこを思つて此方も暫らく

權三 世に長らへるも今宵限り。

小紫 色にはあらぬ縁切りの

權三 命のきぬぐ、花に風。

小紫 その身もこの世のさらば垣

彌市 昨日は仲も吉原に

權三 立てし屏風も今日は又

小紫 雀形なる裏表

彌市 破れかぶれの刃と刃

權三 比翼塚なる

小紫 互ひの手の内。

ト權三は刀の柄へ手をかける。彌市、探りながらこれをとめる。小紫、側にある馬盃を打返し

覆水、盆に

權三 返らぬ意地づく。

善右 その盗人を叩き出せ。

皆々 こいつら二人を

ト權三と彌市へかゝる。立廻り。

くらサア、モシ、おいらん

小紫 あんな者に構はずと

善右 そんなら奥へ

權三 心の腐つた

小紫 それでも武士かえ。

權三 オ、誠の武士の、性根は知るまい。

ト小紫に立ちかゝる。皆々支へて

皆々 大泥坊め、出やアがれ。

ト權三を門口の外へ突き出す。

權三 ア、朱に交はれば

小紫 赤の他人の

權三 義理もこれまで……ア、戀にはあらぬ

彌市 エ。

權三 闇ぢやなア。

ト唄になり、權三思ひ入れあつて向うへ入る。

皆々 太え奴もあればあるものだ。

彌市 ア、氣がゝりなこの場の始末。殊に小袖の紋どころ

忠次 うぬも同類

甚兵 此奴は會所へ

ト兩人、彌市を兩方より引立てる。

皆々 おいらんには、マア、奥へ

小紫 よもやと思へど人ごころ……これぞ尋ねる

ト思はず短刀を抜きかける。皆々思ひ入れあつて

皆々 エ。

トこれにて小紫、鞘をシヤンと納める。彌市、立ちかゝるを、甚兵衛、忠次引据ゑる。この途端に木の頭。

小紫 サア、行かうわいなア。

トきざみにて、「石橋」の切りよろしく、拍子

三五八

幕

本舞臺、二間の屋體、向う鼠壁、上の方一間の中二階、下手中窓の障子、いつもの所に門口、幕の内より善好、お辰、忠次、皆々以前の形、わやくと捨ぜりふ。下の方に善好の迎ひの者、門口にゐる。流行り唄にて幕明く。

忠次 コレサく、善好さん、怪しいとは、そりや何が怪しいね。

善好 怪しいと云つたは、外に人も居ない所で、お辰を捕へて眞猫とは、羨やましい譯だな。

たつ オヤ、善好さん、わつちやア否だよ。

忠次 コレサ、善好さん、もう氣休めもい、加減にして、早く行きなせえ。おいらはこれから、ドリヤ、

料理番でもいびらうか。

ト奥へ入る。

善好 オイく、使ひは誰れだ。

使ひ ハイ、アノネ、木場の寮へ、森山の旦那がお出でなされましたから、ちよつとお出でなされませ。

善好 大音寺前から、深川の木場まで、ちよつと行かれるものか。併し、駕籠にでも乗つて行かう。お

辰どん、おかみさんによろしく

たつ オヤ、直ぐにお歸りかえ。

善好 よんどころねえ事で

たつ お惣さんだね。

善好 大の慾心サ。

若者 サア、お出でなされませ。

ト時の鐘、善好は若い者を連れて向うへ入る。お辰は奥へ入る。バタ／＼になり、向うより勝山、袖頭巾をかむり、走り出て來り

勝山 わたしが身を抜いて下さんした權三さん、この三浦屋の寮へ來て、小紫さんとやら、突き出しのおいらんに、忍び逢ふとの事ゆる、譯も聞きたし、腹も立つ、どうぞ逢ひたいものぢやが。

ト舞臺へ來り、門口を窺ふ。奥より扇吉出て

扇吉 先刻食入れを落したが、こゝらには無いかしらん。

ト尋ねる。

勝山 モシく、扇吉さんく。

三五九

ト門口を見て

扇吉 オヤ、勝山さん。どうして爰へ來なすつた、

勝山 わたしや權三さんといふ人に、逢ひに來たわいなア。

扇吉 なんだ、權三さんだ。ハ、ア、先刻の按摩が、慥か權三といつたが。カウ、勝山さん、慥かお前を黒焼き屋で

勝山 身拔きの金を、出してもらうたお方ぢやわいなア。

扇吉 待ちなく。道理で見た顔だと思つた。ありやア小紫さんへ大心底だぜ。

勝山 それく。それに逢ひはないわいなア。どうぞ逢はして下さんせ。

扇吉 何だか様子は知らぬが、いろくのもめがあつたから、今し方歸りなすつたが、又出直してござるだらう。カウ、勝山さん、お前權三さんに逢ひたくば、斯うしなせえ。

ト勝山に喚く。

勝山 そんならアノ、小紫さんの着物を着て

扇吉 おいらんの眞似をして、灯を消して置くと、小紫さんと心得、權三さんが忍んで來たところで、胸ぐらを取り、お前はくくと、恨みのありたけ。

勝山 どうぞお前、よいやうに。

扇吉 一番南北を書いて見せやせう。

勝山 そんならこれから

扇吉 忍ぶ所は奥二階。

勝山 權三さんがござんしたら

扇吉 必ず聲を出すまいぞ。

勝山 合點ぢやわいなア。

扇吉 そんなら勝山さん

勝山 何かとお前の……嬉しうござんす。

扇吉 コレサ、靜かにしなせえ。

ト扇吉勝山よろしく思ひ入れ。時の鐘、流行り唄にて、奥へ入る。直ぐに奥よりお倉先きに、忠次郎鉢箆を持ち出て來り、跡より宅兵衛、三勝の手を引き出る。この跡よりお春附き、長吉、いろくの酒道具を持ち出る。

宅兵衛 お倉く、なんと、イケしつこい野郎ぢやアねえか。

くら お前さんの手前、お氣の毒でござりますが、番毎にごたつきますわな。
はる サアモシ、座敷を更へて、爰で飲み直しませう。
長吉 モシ、旦那え。あの野郎の事は、わつち共が始末を致しやすから、大びらにこゝでお始めなされませ。

トこの時奥にて

半七 否だく。濟まねえぞく。

ろく マア、半七さん、ようござんすわいなア。

善六 コレサ、靜かにしなせえく。

くら モシく、あんな狂人に構はずと、そろくとおそこで始めませう。

ト半七、お六、善六争ひながら出る。

半七 なんだ、おれを狂人だ。大笑ひだ。どつちが狂人か知れねえ。濟まねえぞく。

善六 コレサく、靜かに云つても解つてゐるわな。

半七 何が解るものか。うぬからして解らねえ。コレエ、うぬが口入れで、男の手切れに賣つたあの女だ。元からの譯も知つてゐるやアがつて、なぜ一緒になつて、小否らしい、女郎もるねえ薄ッ暗

い座敷へ出したのだ。うぬらは藝者をころばして、その上ツ汁でも吸つてゐるやアがるのだらう。

この三浦屋の察ぢやア、出合ひ宿をしやアがるのか、途方もねえ奴等だ。

宅兵 カウく、お倉、田夫野人で恐れるぜ。野暮な男だの。

くら ようござります。わたしが居ります。……カウく、半七どの。たとへ何であらうと、お客の座

敷先きで、何だな、大きな聲をして。お前は證文の表にやア、兄だによ。奉公先きは主人方の勝

手次第と、證文に書いたぢやアねえか。あんまり大風な口をき、なさんな。丁度、コレく、こ

のよしこのの文句にもある通り

ト以前の本を出し

「年のあるうちや親兄弟にさへ、まゝに話しもなりにくい。奉公といふものは、さういふ譯のものだわな。

半七 證文はその通りでも、三勝は何の奉公に寄越したのだ。藝者奉公には出したが、客に抱き寝をさせようといつては出さねえ。なんで人の女房に疵を附けた。客は間男だぞ。

善六 これサく、それぢやア一分が解らねえ。なんでもかでも、表向きは兄の證文ぢやアねえか。女房だの、間男だのと云つちやア、筋が違ふぜ。

半七 筋が違はうが、骨が違はうが、主人方で後ぐらい事をすりやア、此方も横を云ふのだ。給金は取つたが、女房を抱き寝をさせようといふ證文は出さねえ。半七が男は廢つた。どいつも、こいつも、おれが相手だ。

善六 それぢやア話しも何も出来ねえ。無法といふものだ。

半七 無法を云つたらどうする。この間抜け野郎め。

ト眞盆にて善六の頭をくらはせる。これにて善六疵附く。

長吉 カウく、とんだ事をした、疵が附いた。

忠次 マアく、血を拭ふがよい。さぞ痛からう。

トよろしく介抱する。

善六 ようござえますく。構ひなさんなく。疵を受けりやア受けたやうに、話しがなりやす……カウ、半七どの、貴様はおれが頭をぶちこはしたな。

半七 そんな頭を十や二十ぶちこはしても、焚き附けにもなるものかえ。

忠次 滅法界な事を云ふ。人の頭を澤山さうに

ろくほんに、どういふ譯か知らねども、三勝さん、お前黙つてゐなさんしては

はる 半七さんの腹立ち。お前、何と思つてゐなさんすぞいなア。

ト云うても、三勝は俯向いてゐる。

宅兵 ハテ、あんな暴れ者にか、つちやア、三勝だといつて仕方もあるめえよ。

くら コレ、半七どの、どうすりやこなたの心が濟むえ。

半七 何にもいらねえ。女を二三日貸してもらはう。

くら 厚かましい事を云ひなせえ。岡場所なら格別、吉原だよ、御免の場所だよ。

半七 その吉原で、藝者を轉ばしても濟むか。

くら エ、

半七 うぬらに扱け足をとられてつまるものか。

善六 カウく、お倉さんく、打ッちやつておきなせえく。……半七どの、おれが頭をぶちこはして、奉公先きの女を二三日貸せも餘ッほど押しが強い。藪に萬難な事を云つちやア通らねえ。瘦せても枯れても、判人を渡世にしてゐる、この善六が爰にゐる。男なら、三勝を連れて行つて見させえ。

半七 連れて行かねえでどうするものか。おれが鼻アだものを。

くら 善六さん、いゝかえ〜。

三六六

善六 ハテ、よしサ〜。連れて行きやア此方も商賣づく。天下の無え國ぢやアあるめえし、その覺悟で連れて行くがい。

半七 それをうぬに習ふものか。脊中へひゞの切れるを怖がつて、附合ひがなるものか。元は武家からごろつきに、なり響いたる悪黨も、町家に住んで温なく、商人ふりと見せかけても、それぢやア埒が茜足袋、水道の野晒し半七、異名を受けた兄さんだ。誰れだと思ふ、成田屋が聞いて呆れる。

トのし〜前を通り、三勝の手を取り

サア來や。

三勝 どこへ。

半七 どこへといふがあるものか。連れて行つて、久しぶりで女房にするワ。

トこの時上手の中二階に、茜屋の母、以前のなりにて出て、三勝に死なうとして見せる。三勝思ひ入れあつて

三勝 そんな狂人の女房に、なる事は眞平御免。

半七 なんだ、をかした事を云ふな。ア、酔つたな〜。

三勝 藝者だものを、酔はなくつてサ。お前、わたしを連れて行つて、女房にすると云ひなさんすが、女房は一人あるぢやアないかえ。

半七 どうしたと。

三勝 しかも時々金の無心、小遣ひ取りやら、頼もしいお内儀さんの、元木にまさる裏木なし。心あらば元々へ、返りたいとのこの文體。

ト以前助八が渡せし貰入れと文を出し

こんな氣まづい男なら、もうお断わりでござんす。

ト投げ返す。半七取り

半七 オ、この文がどうしてめえの所に……イヤ、こりやア何だ、間違ひだ。何よ、ちつと譯のある事だ。これを見たら腹も立たうが、おれが悪い、あやまるよ。腹が立つなら、おれが所へ來て、どうでも云はッし。爰ぢやア今てめえの知つてゐる通り、云ひが、りて、少し男の立たねえ始末だ。爰で腹を立つてくれぢやア、ちつと間が悪い。

ト側に落ちてゐる本を取り

三六七

今の流行りの二上り潮來。「わたしが悪けりやあやまらう」……こんな役に立たねえ女は捨て、しまつて

トあたりへ件の貰入れを捨て

サア、歩べよ。

ト手を取る。

三勝 イエ、否でござんす。一旦侍ひを嫌うて、お前に添うては見たなれど

ト本をひろげ、思ひ入れあつて

この文句にもある通り、貞女立つたり気がねをしたり、人にやこげだと云はれたり。うまらぬ者は女一人。思つて見れば、武士は武士だけ眞實な。それゆゑとんと思ひ切り、宅兵衛さんの方へ、行く心になつたわいなア。

半七 そんならわりやア……イヤ、そりやア嘘だ。何か譯のある愛想つかし。芝居でいくらもする格だぜ。

三勝 ソレ、さういふお前が自惚れゆる、人に兎や角……サア、嘘でない證據には、主と今こゝで女房の約束。

宅兵 小びんながら、色男はおれだの。三勝にどんな足があらうが、そこがやんこの當り前。コレ

ト本へ指をさし

「今年や南瓜の當り年」サ。

三勝 たとへどなたがどう云はうと

宅兵 おれが女房。時代に云は侍ひの、今日から奥様。

半七 コレ、三勝、そりやア地金か。

三勝 何しに嘘を……證據は腕の入れほくろが

ト出して見せる。

半七 そんならそれまで

ト三勝はこなしあつて、宅兵衛の脇差しを投げ出し

三勝 腹が立つなら、それで。

ト柄の抜けかゝつた脇差しをわざと渡す。

半七 うぬ、どうする。

ト刀を取り、立ちかゝるを、お六とめて

ろくモシく、半七さん、尤もぢや、尤もぢやが、それは短氣でござんす。

半七 エ、お六さん、危ねえから、退きなせえ。

ろく マアく、待ちなさんせく。……コレ、三勝さん、そりやお前にも似合はぬぞえ。今まで外の藝者衆が、誰れと切れたの、出来たのと、風呂の噂を聞く度に、お前は何と云はしやんした。惚れた男を澤山さうに、よう思ひ切られた事と、笑ひなさんしたぢやござんせぬか。この本にある文句にも「人がどのやうに云はうとまよ、わしが目がねで惚れたもの」と、お前の作つたこの唄を、反故にしては、濟むまいがな。

はる わたしも常から、仲を知つた半七さんの事。どうなる事やら三勝さん

三勝 大きにお世話、おいておくれ。否だよく藝者は否よ、地味ななりして主の側」。

ト本を読みながら、宅兵衛に寄りかゝる。

半七 アレ、あんな事を吐かすわな。

ト又立ちかゝる。奥より助八、お通を連れて出て来り

助八 カウく、半七どの。お前、女と死合ふなら、この子の方を付けて死ぬがよい。親が無ければ、跡で里親が難儀になる。この子を其方へ受取るか、但し、この前からの里扶持の残り一兩一分、

いま寄越すか。

半七 エ、それを爰で云ふ事か。明日やらう。

助八 コレサく、錢も無い癖に、明日やらうも氣が強い。いま女と死合ふではないか。それをどうして明日まで待たれるものか。いま寄越しなせえ、平常から大風に力味まはるが、金は無いか。エ、しみツたれな男だ。

半七 なんだと。この野郎は

ト助八の胸ぐらを取る。

助八 アイタ、、、、。里扶持も寄越さずに、おれをどうするのだ、この野郎め。

トくらはせる。半七掴みかゝるを、善六、半七を捕へ

善六 先刻から黙つてりやア、イケふざけた野郎だ。おれが頭をぶちこはして、女を連れて行くもすさまじい。連れて行きえやアしめえ。うぬは行く氣でも、女が不承知だ。自惚れた野郎でござらア。

ト突き倒す。おくら、半七の胸ぐらを捕へ

くらはは主人のわしを、よくいろくな悪態をついて、兄で候ふと證文書いて、また女房だの何の

と、どなたが何と云つても、こればかりはわしの方が理屈だよ。おれが抱へたあの三勝、年季の
うちは此方の儘だよ。指でも附けて見やアがれ。

半七 うぬらア寄つてかよつて

ト立ちかよらうとする。お通、半七に取りついて

つう 父さま、怖いまいなう。

トこれにて半七、サツと思ひ入れ。

助八 サア、腹を立つなら里扶持の、金を寄越して、存分ぬかせ。

半七 サア、その金は

善六 ナニ、金があるものが。金と智慧は無え面サ。

助八 金が無けりやア、この餓鬼の、着物もおれが着せたのだ。裸にしてうぬが方へ。

トお通を褌絆一つにして、着物を引つたくる。

つう 父さま、寒いまいなう。

ト半七に取り附く。三勝思ひ入れ、二階を見返り、サツとなる。半七口惜しき思ひ入れにて、お通を

抱へ

半七 いゝわえく。べら坊め、ナニ寒い事があるものか。われも半七が子だ、吠えるな……エ、コレ、
落も目になつたを附け込んで、うぬら、よくむごい目にあはせたな。三勝、わりやア、この餓鬼
が此さまを見て、悲しくも何ともねえか。女の子は女に附く……コレ、小僧、てめえ寒くば、
かよアに温ためてもらへ。

トお通を突きやる。

つう 母さまいなう。

ト三勝に取り附く。三勝こなしあつて

三勝 エ、モウこの子は。いつわたしが母さんだよ……子供に科はなけれども、出家が憎けりや袈裟ま
でと、わたしや子は嫌ひぢやわいなア。

トむごく突きとばす。半七抱へて

半七 エ、邪慳な奴だなア。現在子にまで、うぬはマア

三勝 鬼とも蛇とも思はんせうが

ト二階へ思ひ入れあつて

これが藝者馴れたるお庇。浮氣商賣いつとても、今日の楽しみ、明日の仇。色と藝者の三味線は、

新らしいのがなり次第。ばちがあたつて三の縁、切れる心になつたのも、未はどうがな縁巻きの、めぐる縁なら身の片付き。不實も浮氣もお互びに、人の事ぢやと目くじら立つて、身にも覺えのないやうに、あのマア、とんまな顔わいなア。

半七 黙りやアがれ、とち女め。轉び合ひの色事とは、譯の違つた二人が仲。話しづくならさつぱりと倦きたら切れてやりもせう。大勢寄つた人中で、恥をかゝせる愛想つかし。子に引かされて癪癪の、蟲をこらえたこの場の始末。佛の顔も、コレ、三勝、さうした義理ぢやアあるめえが。

三勝 サア、それ故やつたその脇差し。サ、とつくり思案した上で、サア、切らしやんせう。思ひ切らんせ木登りよさんせ、落ちて死んでもわしや知らぬ。

ト件の本を顔に當て、讀みながら愁ひのこなし。

半七 うぬ、その口を

ト立ちかゝるを、宅兵衛、半七を引附けて

宅兵衛 野暮を云ふまいくと、思つてゐたがこれからは、三勝はおれが女房。最前からなめ過ぎた小野郎め。薄穢ねえさまをして、身が目通りへ出るさへあるに、じたばたひろく慮外者。遊びの座敷で空々しい、鼻毛の伸びた大べら坊め。

ト半七を足蹴にする。

半七 もう料簡が

ト立ちかゝる。お通、半七に取りすがり

つう父さま、怖いわいなう。

トお六側へ寄り

ろくオ、尤もぢや。コレ、半七さん、この子可哀と思つてなら、口惜しいところも辛抱しなさんせ。

ほんにマアむごたらしい。寒からうに、わたしが前垂れなと

ト前垂れ取つてお通に着せる。

半七 アイ、お忝うござりやす。エ、吠えるなく。……片ツ端、云ひ分のある奴等なれども、

何を云ふにも、この餓鬼が不便さゆる。お六さん、おらア口惜しい。

ト男泣きに泣く。三勝思ひ入れ。お六、いろくいたはり

ろく尤もでござんす。ほんにくあんまりな。

ト三勝俯向き、くひしげる思ひ入れ。

助八 半七は泣くか。こいつは大笑ひだ。

善六 泣く筈だわな。色には愛想をつかさね、ほんの女房にやア叩き出され、内は無し、銭は無し
長吉 智慧も無し、しだらも無し。

忠次 骨無し、皮無し、やくたい無し。

くら 此よしこの文句の通り「主のやうなるとんまな馬鹿に、なんの惚れ手があるものぞ」。

長吉 「自惚れさんすなお前の身持ち、愛想つかすも無理ぢやない」。

忠次 「現在女房は勤めの身空、亭主やどてらでめぐりひく」。

善六 「勤めさせては男が立たぬ、というて受け出す金は無し」。

助八 「色に逢ひたくば泥棒さんせ、首の無いのも粹なもの」。

皆々 ア、よしこのく、ちけえねえく。

ト口々に喋す。半七口惜しき思ひ入れにて立ちかゝる。お通は半七に縋り、拜む。これにて半七サツとなつて

半七 いッワく。怖い事はねえ。案じるなく。どうもしやアしねえ。

トいろくすかし

カウ、助八どん、お通を此方へ丸襦で引取れば、こんたの方に、云ひ分はもう無えな。

助八 其方へ渡せば、云ひ分はもう無え。

半七 そんなら此方に残りの勘定がある。

助八 エ。

半七 今おれをよく締めたな。うぬでもせめて

ト箕盆にて助八の頭をぶちこぼす。助八「ワッ」と後へ倒れる。

皆々 とんだ事をしやアがる。

ト半七を捕へ、お通もろとも門口へ突き出し、戸をヒツシヤリ締めて、中より押へる。

半七 コレ、三勝、もうこの上は向う面、色でも戀でもねえからは、大手を振つて歩くがい。人の女房を引つたくつた、これが報いだ。元を乱せば三勝とは、主と親とに繋がれし、敵同士のその縁

やら、とうくその身も今宵の内。うぬ、安穩で

ト思ひ入れ。

つう 父さまいなう。

ト半七はお通を抱き、サツと顔を眺めて

半七 ア、子は三界の……覚えてるろよ。

ト唄になり、半七、しほくと向うへ入る。この時二階の茜屋母、この様子を窺ひ、うなづいて障子を閉す。

くらオ、三勝出かした。きついもの〜。
宅兵 誠に本心、見えすき山〜。

忠次 旦那、いつの間にか色男になつたね。
長吉 尾土菊五郎の通りだ。

宅兵 ナニサ、少つとばかり似てゐるのサ。
善六 時に、助八はどうした。氣を慥かに持たつせえ〜。

ト助八を介抱して引き起す。

助八 ナニサ、些細な事サ。この位の罰はあたりさうなものだ。
善六 イヤ、お互ひにこの頭が

助八 はれまして結構な春でござります。
皆々 おきやアがれ。

助八 オヤ〜、あのべら坊め、差し付けぬ脇差しゆる、忘れて行きやアがつた。

くら ナニ、それは旦那のだよ。

三勝 折角渡したその一腰
宅兵 ヤ。

三勝 ほんにマアうつそりな
宅兵 イヤ、これから今夜は木母寺の、半右衛門がところで、夜明しの大浮きと洒落やせう。

くら それがようござります。直ぐに堀から屋根船で、お春も一緒に
はる わたしはどうも今夜の様子

ろく およし〜。わたしと一緒に町へお歸り。
くら ムウ、いらざるお世話。併し、否ならおよしな。

皆々 私どもはお跡から
宅兵 お倉と二人、船に乗つて、待つてゐるによ。

善六 今夜はたつぷり大手をひろけ
助八 渡りがあらば押して推參。

くら お前の働き、お禮は胸に。

忠次 祝ひに一つめませう。

皆々 ヨイ／＼。

くら サア、お出でなされませ。

ト 騒ぎ唄になり、皆々わやく／＼云うて奥へ入る。三勝お春残り、こなしあつて

三勝 半七さん、堪忍して下さいせんせ。

ト 泣き伏す。

はる そんならお前は

三勝 あのお通にも今宵が別れ。

はる コレ、三勝さん

三勝 せめて一筆

ト 思はずお春を見て

と云ふのは嘘だよ。

はる エ。

三勝 サア、來な。

ト 唄になり、三勝ツイと奥へ入る。お春も續いて入る。引違へて奥より善右衛門出て來り

善右 宅兵衛様は三勝を連れて、木母寺へ行くとの事。おれもどうぞ小紫を連れて、跡から仕掛けよ

うわえ。

ト あたりを見て、半七が捨てたる紙貫入れを拾ひ

なんだ、貫入れが落ちてあるが。

ト 中より件の文を出し

なんだ、「お園どのへ、半七。」……ハ、ア、あのころつきの半七めが、先の女房の所へやる文だな。

エ、嫌らしい。ドレ／＼、読んで見てやらう。なんだ、「わざ／＼申し入れ候ふ。よんどころな

き世の中にて、飽かぬ仲を引き別れ、又ぞろ斯様な事申し遣はし候うては、お下けすみのほど恥

かしく候へども、我れら不料簡にて今の身の上、悔むに詮方なく、いろ／＼の附き合ひ、又は友

達の義理、その外引くに引かれぬ男づくにて、金子入用に候ふ間、別れしそもじ様のところへ無

心申し入れ候ふこと、よく／＼の仕儀とお察し、少々なりとも御都合なし下さるべく候ふ。又々

承り候へば、只今では長九郎とやらいふ男が入夫に参り候ふよし、小糠三合の醫へ、よく／＼

思ひ合つた仲と存じられ候ふ。あまり／＼聲を可愛がり過ぎて、腮で蠅を追はせぬやうになされ

かし。この間よそにてちよつと見受け候へば、随分よい男、顔中が目の玉かと存じ候ふ。いづれ入り聲といふものは、間抜けじみた者にて候ふ。元木にまさる裏木なしとお心あらば、元のやうになりたきものにて御座候ふ。いづれ〜聲の長九郎はお拂ひ箱にて、我れらの頼み、御都合下さるべく候ふ。めでたくもし。……ハ、ア、さても〜聲の事を悪く書いたワ。よし〜、この手紙をあゝの長九郎に見せ、思ひ入れしやくつて、喧嘩をさせ、高見で見物。こいつはよい慰みだわえ。

ト懐へ入れ

イヤ、小紫が来る間、爰に待つてもらわれめえ。オ、ある〜。ちつと嫌味だが、その内、ちよつと口中の匂ひよけで

ト懐より楊枝齒磨きを出し

なんでも身綺麗に、思ひ入れ掃除をしあけて。併しまだ、どうやら口が臭いやうだ。

ト齒磨きを遣うて、いろ〜あるべし。本釣り鐘、誂への合ひ方になり、向うより權三、頰かむり、尻からげにて出て来り

權三 今鳴る鐘は慥かに八つ。その音も霞む權八が、命の寂滅、無常の鐘。思へばこれまで由なき義理

立て。討ち遅れたる親の敵。暫しも不孝な身の云ひ譯。今宵ぞ本望。おのれ權八。

ト思ひ入れあつて舞臺へ来かゝる。この時下座の口より夜廻り、提灯を提げて、拍子木を打ちながら出て来り、權三を見て怪しむ。權三は顔にて、門口の戸を明けると指圖する。夜廻りは慄うてゐる。

權三捕へて、ちよつと囁く。夜廻り呑み込んで、門口を明けて、一散に逃げて向うへ入る。この時善右衛門そこらを片付けて

善右 オイ〜、誰れだ〜。

ト門口へ出る。權三二太刀に善右衛門に切り附ける。善右衛門「アツ」というて駈け出すを、後よりボンと切り倒す。この時上手の二階の障子を明け、扇吉手燭を持ち、小紫の衣裳を着たる勝山の手を取つて出て来り

扇吉 サア〜、おいらんえ。爰に待つてお出でなさると、今にわしが彼の人に。小紫さん、必ず待つてお出でなされませ。

ト探り〜奥へ入る。權三これを聞き、さてはトいふ心にて領づき、探り〜二階へ忍び、勝山を探り見て、抜打ちにボンと首を打落し、あたりを尋ねる心にて

權三 ヤ、天國所持と思ひの外

甚兵 アイく、只今参ります。

ト思ひ入れ。この時奥にて

トこの聲を聞き、權三恟りして、勝山が首を捉げ、抜き身を捨て、うそ／＼二階より下りて來り、灯にて首を見る心にて側へ寄る。甚兵衛出て來り

ヤア、わりや權三だな。人殺し。

ト聲を立てる。これにて權三、甚兵衛が捉げたる行燈を切り下げる。

ワア、人殺しだ。

トこの聲を聞き、權三是非なく甚兵衛を切る。これより「人殺し／＼」の聲。拍子木の音にて、若い者大勢、棒を持ち、あちこち入り亂れる。此うち權三、柴垣の蔭に隠れてゐる。皆々、わや／＼云うて下座と向うへ入る。この人数のうち一人、弓張り提灯を落しゆく。權三この提灯の灯にて、首を改めんとする後より、長吉忠次出て

二人 人殺し。

トかゝるゆゑ、是非なく立廻りにて、兩人を切り倒す。これにて又灯消える。この前より後へ善六窺ひ出て、慄へながら聲の立たぬ思ひ入れ。權三、善六の襦袢を押へ、「この提灯へ灯をつけて來い」トい

ふ仕方。善六、慄へ／＼提灯を持ち、奥へ行かうとする。權三思案して、イヤ／＼といふ心にて、後より善六を一かせ切り、あたりを窺ふ。時の鐘にて、大やうにこの道具廻る。

本舞臺、一面の二階づくりの外側。櫃子、庇の下九尺の格子の間。前側駒寄せ。上の方、九尺の間。黒堀見越しの松、植込みよろしく、すべて三浦屋の別荘裏手の道具。時の鐘にて道具納まる。

ト直ぐバタ／＼になり、下座よりお春お六お辰若い者大勢逃げて來り

ろくきつとこんな事であらうと思つた。

はる怪我せぬうちに、逃げようぢやござんせぬか。

たつわたしや物が云はれぬわいなア。

ろくこれを思へば、先刻の半七さんも、此やうな事にならねばよいが。

はるわたしもそれが苦勞ぢやわいな。

トげたく／＼になり下座より扇吉、鉢巻、尻からげにて、三浦屋と書きし弓張り提灯をつけて出ゝ來る

皆々 そりや又來た。

トあわてる。

扇吉 おれだよ／＼。

皆々 扇吉さんかえ。

扇吉 マア、お前達に怪我が無くつて、めでたい。

ろく 扇吉さん、誰れも怪我は無かつたかえ。

扇吉 どうだか、てんやわんやでさつぱり解らぬ。おかみさんは積を起し、おれは本店へ知らせ、その上組合ひの衆を呼びに行つた。みんなも怪我せぬやうに、早く逃けるがよい。

ろく わたしが見た時は、甚兵衛どんが切られた様子。

扇吉 いゝ氣味だ。あいつらは殺されても構はねえ。サア、歩びなせえ。

ト皆々、わやく云うて向うへ入る。時の鐘、詠への合ひ方になり、二階の櫃子をメリと切り破り、權三、抜き刀、女の切り首を携へ、上手の黒塀を切り破り、小紫の權八、女の着物を凍々しく端折り、件の白鞘を持ち出る。下手の格子の間を打ちこぼし、丹助、そぼろなる襦袢のなり、頬かむりにて、茜屋母の衣裳を抱へ、出刃庖丁を持ち、三人一時に出て見得。この時空へ月出る。權三は首を見る。權八は白鞘の心を見

權三 親の敵の權八と、思ひの外に、こりやコレ慥か

權八 ヤ、天國ならぬ、こりや似せ物。

丹助 そんならそれが

權三 思へば無駄事。

ト權八は白鞘を、何心なく捨つる心にて、丹助の前へ抛り出す。丹助胸り飛び退く。權三は刀を拭ふ。三人一時に、途端に木の頭。

丹助 オヤ、危ない事。

ト件の白鞘を拾ふ。權三は下を見下ろす。權八はあたりを窺ふ。キザミにて拍子。迷ひ子の鳴り物にてツナギ、引ツ返す。

幕

本舞臺、向う一面の打抜き今戸橋、金波樓、聖天山など遠見の書割り。浪手摺り。舞臺真中、芦の茂りたる中の洲。下の方へ寄せて詠への屋根船。すべて山谷堀の洲のかゝり。この屋根の上に船頭一人。四布蒲團を冠り寝てゐる。船の中に宅兵衛お倉、酒飲んでゐる。三勝は俯向き、ふさぎある。流行り唄にて幕明く。

宅兵 あいつらは、もう来さうなものだ。

くら イエ、来ない方がようござりまする。この船の中で三勝と、しつほり濡れる水馴れ棹とは、

どうぞござります。

宅兵 イカサマ、色にはなまじ連れは邪魔。コレ、三勝、大ふさぎだな。どうでもあの半七の間抜けが事を、思ひ切られぬか。

くらまだあんな奴に未練が残つてゐるのか。

三勝 イ、エ、なんの。一旦愛想づかしをした男、未練が残る位なら、別れやせぬわいなア。モシ、

宅兵衛さん、これからは變らぬ夫婦、必ず見捨て、おくれでないよ。

宅兵 ア、見捨て、よいものか。斯う打解ける上からは、其方の望みの脇差しを

三勝 ほんまに下さんすか。

くら女の癖に、味な物を欲しがら其方。これにはなんぞ

三勝 サア、その譯は

宅兵 譯を云やれ。

ト切なき思ひ入れあつて

三勝 サア、譯は寝てから話さうわいなア。

ト宅兵衛に寄り添ふ。

くらそんならわたしは舳へ出て

三勝 この脇差しは其方の方へ。

トお倉は舳の方へ出る。三勝は脇差しを出して置く。

宅兵 オイ、船衆、そろく出して下せえ。

くら上手の方だよ。

ト屋根の上の船頭、蒲團を取る。半七にて、そろく下りて、三勝の置いた脇差しを取り

半七 うぬ、三勝め。

トこれにて宅兵衛惘り。

宅兵 ヤア、半七か。

ト立ち出て捕へるを振り切り、宅兵衛を川の中へ切り落とす。これにて雷の音、雨車。直ぐに屋根の内へ入り、三勝を捕へる。

三勝 半七さん、たつた一言

ト云ふを、かまはず一かせ切る。

くら ヤア、人殺し。

ト云ふを及び腰にお倉を川の中へ切り込む。これにて屋根毀れて、三勝書置きを差し附ける。半七白刃を振り上げ、見待。雷の音、誂への鳴り物になり、三勝洲の上へ逃げ上がる。半七續いて追ひかけ三勝をむごく切り殺す。この立廻りのうち、三勝の書置き、半七の持ちし脇差しにまとひ附きしを、その儘とどめを刺し

半七ヤイ、畜生あまめ、覺えたかく。

トさんぐくに切り

人を殺したこの半七、爰で直ぐに死なうとは思へども、うぬと心中したと云はれては、いまくしいから、所を變へて……さりながら、おれが死んだらお通は孤し兒。せめてどこぞへ頼んだ上トよろしく思ひ入れ。この時洲の芦間へ船のみよし見える。半七は書置きのとひし脇差しを持つたまゝ、下手の船に乗る。芦間の船、だんく漕ぎ附け、半分ほど出る。この小舟に茜足袋屋の長九郎乗りあて、あたりを見て

長九時ならぬ雷で、づぶ濡れに濡れた……オイ、船公、待たツし。洲へ乗ツ掛けたぜ。ドレ、おれが突き出してやらう。

ト洲へ飛び上がり、船を突き出さうとして、三勝の死骸を見附け

ヤア、こりやア人が切られて

ト半七花道へ棹をさしかゝる。此もやひを捕へ

慥かに怪しい

ト半七持つたる脇差しを書置きの附いたまゝ打ち附ける。これにて長九郎の持ちしもやひ網切れて、控と座る。これを木の頭。長九郎は件の二品を窺ひ見る。キサミにて、よろしく拍子幕幕の外、半七棹をさし、騒ぎ唄にて向うへ遁がれ入る。あとシヤギリ。

第二番目 三幕目

岩井町茜足袋屋の場
同百足煙草屋の場

役名——半七女房、お園。女順禮、お勝、半七娘、お通。權八女房、八重梅。笹野權三。茜足袋屋の長九郎。菫屋、唐犬權兵衛實ハ有竹丹助。本庄下部、助市。茜屋平左衛門。岩淵久内。役人、藤馬。茜屋母、おかや。野晒し半七、小紫實ハ白井權八。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、正面暖簾口、上手に腰障子。下の方足袋反物品々の書割り、軒より

柿に三升つなぎの暖簾。足袋屋の看板。門口に「四ツ谷千葉丸くすり取次所」といふ誂への看板掛けあり。舞臺本疊。上の方下座に誂への萩垣。下の方路地口を取り附け、よき所に好みの衝立て。すべて岩井町。昔足袋屋の體。暮の内よりお園、世話女房の拵へ、母おかやと前垂れがけにて。足袋を縫うてゐる。下女おせん、手間取りの才助。兩人差向ひ、石の上にて木綿を打つてゐる。門の外にお勝、笈摺、革籠を背負ひし女順禮の拵へにて、報謝乞うてゐる。初午の鳴り物にて暮明く。

才助 コレサ、お仙どの、もうちつと身にしみて打たないか。

せん それぢやというて、わたしや手が痛うて、コレ、見やしやれ、此やうに豆が

才助 成る程、役に立たない手だぞ。併しそいつは痛からう。大きな豆だ。……一イニウ三イ。持ち前の豆を入れて。

トちよつと戯れる。

せん エ、モウ、何をするぞいなア。旦那さんに云ひ附けるぞえ。

かつ ハイ、御報謝お願ひ申します。

ト思ひ入れあつて

かや コレ、仙や、表に報謝せうではないか。

せん ハイ。

ト錢を持ち行き

サア、進ませませう。

かつ ハイ、これは有り難うござりまする。モシ、御新造様、お袋様、有り難うござりまする。

そのあれ、あれ御覽じませ。爪はづれも尋常な女中でござんすが、手の内乞ふとは、氣の毒な事

でござんすな。

かや ほんにマア、まだ若い女子の順禮するとは、よくの事であらう。其方、連合ひや子供はござらぬかいの。

かつ ござりまするが、此やうな恥かしい苦勞いたしまするわいな。

かや ヤレ、それは氣の毒な。コレ、時分なり、茶漬でもまるつて行かしやらぬか。

かつ 御深切に有り難うござりまするが、まだ欲しうもござりませぬ。ハイ、これは御報謝にあづかりましてござりまする。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト町嚙に挨拶して、路地の中へ入る。

才助 モシ、あんな順禮に甘い詞を掛けると、たびく來てうるさいものでござりまするぞえ。

せん また其やうな邪慳な事云うて、旦那様に叱られうと思つて。

才助 オツト、あやまり。ほんに旦那といへば、長九郎様は、今朝會所から呼びに來ましたが、何の用でござりましたえ。

かや あの養子息子の長九郎を、會所から呼びに來た様子、お園、案じる事ではあるまいかいの。

そのさればでござんす。この頃世間に、ひよんな噂もあり……イエ、何も案じる事ではござんすまい。どこぞへ道寄りでもしてゐるやしやんすやら。もう歸りなさんせばよいに。コレ、仙、茶でも沸かしておきやいの。

せん ハイ。

ト七輪の下をあふぐ。

才助 ア、又おかみさんが焼き餅だな。そこで茶を沸かさせて、焼き餅を食はうといふせんエ、また阿房な事云はしやんすな。

才助 よく叱るお屋敷だ。ほんに、此やうな善いかみさんを捨て、家出をさした内の息子どの、半七様は、餘ッほどな氣紛れ者だ。

かや イヤ、大事な。あの家出しやつた半七めは、わしと親仁どの、仲の實子なれど、不所存ゆゑに

勘當。その跡へ養子して、其方に娶合せた今の長九郎。それは、實體な生れ。わしや生みの子の半七より、今では長九郎がいとしいわいの。

せん ほんに、あの若旦那様はお仕合せ。爰のお内の手間取りから、すぐに跡取りにおなりなされますといふは。

かや それといふが、連合ひ平左衛門どの、以前は白井の屋敷に勤めてゐられた時の、古朋輩のよしみゆる。お家退轉の後、あの長九郎がこの家へ頼つて來て、習ふともなし、縫ふともなしに、一體が器用な生れゆる。足袋職も覚えて、今ではわしら夫婦が、大事の、かゝり息子ぢやわいの。才助 成る程、それも一つは長九郎様の運もよいのサ。おれもこれから商賣を精出して、あのお仙どのを女房にして、夜晝拵ぐつもりだが、おかみさん、仲人をお頼み申しやす。

そのホ、ホ、。そりやわしが呑み込んでゐるわいの。ほんに仙とは、丁度よい夫婦ぢやの。せん アレ、又おかみさんが、あのやうな悪口を。わたしやあのやうな人は嫌ひでござりまする。

才助 これは御挨拶。

かや お仙、もう夕飯にしようかいの。

せん ハイ、そんならお釜の下を焚き付けませう。

その才助も、おまんまにしやいなう。
才助 モシ、まだ夕飯には早うござりやす。
かや そんなら、もう片々縫ひませうか。

トかすめたる屋體囃子になり、馬淵久内、切繼ぎの小袖、一本差し、さんすいなるこしらへにて、
無僧の天蓋尺八を風呂敷に包み、出て来る。門口へ來り

久内 頼みませう。

ト思ひ入れ。才助この内矢張り砧を打つてゐて

才助 それ見た事か。先刻の女順禮が又來ましたワ。エ、手が塞がつてゐる。通つたく。

久内 ナニ、どうしたと。

ト腹を立ち、ヌツと内へ入る。

才助 この物貰ひめが、イケふざけた

ト立ちかゝるを、おかや見附けて

かや これは才助、どうしたものぢや。あなたはお園の

才助 ほんに、親御様でござりやすね。

久内 コレ、若い衆、よくもおれを乞食と見違へて下された。忝い。

ト皮肉を云ふ。

かや ほんに、粗相ツかしいも程のある。畢竟あなたなりやこそよけれ

久内 イ、ヤ、乞食と履き違へられてはよくない。コレ、若い衆

ト立ちかゝるを、お園とめて

そのモシ、父さん、そりやほんの間違ひでござんす。もうよい加減にしやんせ。

才助 おかみさん、そこをどうぞよろしく。イヤ、大しくじりく。

トこそくと逃げて入る。

かや ほんに若い者と申すものは……あなた、ようお出でなされました。コレ、仙や、お茶を上げぬか
いの。

せん ハイ。お茶お上がりなされませ。

ト久内に茶を出す。一口飲んで

久内 ア、ぬるい茶だ。成る程、乞食と見違へる程あつて、イヤ、結構なお取扱ひだ。

かや コレ、お煮花でも拵へて上げやいの。

トお園思ひ入れあつて

その イエモウ、お構ひなされて下さりまするな。もし、父さん、お前、來がけから其やうな事云はし
やんして、わたしや舅御様へ、大抵氣の毒な事ぢやござんせぬ。そしてマア、日暮れ方に其やう
な物持つて、何の用でござんした。

久内 借りようと思つて

その そりや何をえ。

久内 金を。

その エ。

久内 借りる氣でも來ないが、乞食と見立てられたによつて、合力受けぬも大きな損と、今フツと出來
心で、借りる氣になつたのだ。コレ、あいやけの身共が、大事の娘をこなさんに遣つたからには、
親仁がこんな態でゐるのを、まんざら見てもゐられまい。なんとさうぢやアござるまいか。

かや そりやモウ、仰しやらいでも、お前の娘の此お園を、嫁におもらひ申してから、それはく孝行
にしてくれまして、何一つ云ひ分の無い女子。それに免じましても、どうなと致して上げませいで
かないア。併し今は連合ひも、悴の長九郎も宿には居りませぬゆゑ、戻りましたなら、相談も致

しまして

その イエく、母さん、決して構うて下さりませぬ……モシ、父さん、わたしが身にも少つとはなつ
て下さんせ。お前の無心々々も、二度や三度の事かいな。始めの内は内證で、わたしが着類、頭
の物、貸して上げて三日にあけず、又も無心に来やしやんすゆゑ、さうくわたしが自由にも
ならぬ事ゆゑ、こちの人、舅様にもお願ひ申し、これまで賁いで上げたのは幾度やら。その度々
に相應に、心附けて下さんす程、わたしやどのやうに辛からうと思ひなさんす。娘不便と思
てなら、もうく其やうな事、必ず云うて下さんすな、頼みますわいなア。

ト思ひ入れ。此うち久内、空うそぶきゐて、其のまうとして

久内 コレ、女中、葺の火が無いわえ。とんだひつてんな講釋場だ。娘、それでモウ前座は讀んでしま
つたのか。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。

トお仙、火を入れて來り、こなしあつて奥へ入る。

その お前は、慾の半分でも、恩愛といふ事を知つて下さんせ。
久内 さればよ。その恩愛を知つてゐればこそ、今日無心に来たのだ。おれも斯うしてゐても、思はし
くないによつて、旅持ぎの修行にでも出ようと思つて、コレ、天蓋尺八も、この通りに持つて、

可愛い、娘や聾どのへ、暇乞ひの無心。コレ、おかやどの、娘、今度ばかりは快く叶へてくれるがよい。爰の内も、とんだめでたい事が出来て来たぞえ。
かや ホ、、、。久内様の何云はしやるやら。併し、めでたい事は耳寄りな。そりや何でござりますえ。

久内 さればサ。めでたいというて外でもござらぬ。勘當されたあの半七が、山谷堀で、三勝とやらいふ藝者を殺したとの噂。コレ、こなさん達は知らないのか。

そのエ、そりやマアほんまの事でござんすか。道理こそ、先刻も人の噂にチラリと母が耳へも。コレ、久内どの、勘當しても實の子の半七、其やうな大それた事したのが、なんでめでたいと云はつしやるのぢや。
ト少しムツとしたる思ひ入れ。

久内 さればサ。勘當せずに置いたなら、両親の首へも繩の附くのは知れてある。久離切つたりやこそ、その難もマア遁がれやうといふもの。なんと此やうなめでたい事があらうか。その祝ひだと思つて、貸してくれてもよさうなものだな。

そのそんなら、いよく半七さんは

久内 どうで、ろくな死にやうはせまいよ。

トお圓おかや顔見合せ、案じる思ひ入れ。合ひ方、かすめたる聖天の鳴り物になり、向うより長九郎、羽織着流し、手を組、思案の體にて出て来り、門口にて内を窺うてゐる。

かや 勘當したれど我が子の半七。朝夕、箸の上げ下ろしにも、どうか斯うかと案じるもの。好からぬ噂を聞くにつけ

そのわたしやつかへが起つたわいなア。

久内 なんの案じる事があるものか。以前はわれが天にもしろ、今は縁なきあの半七。マア、それは格別、サア、どうだ、娘、離縁した亭主の事を案じる隙で、親の云ふ事きいてくれろ。エ、こゝな不孝者めが。

そのわたしや、そこどころではござんせんわいな。

久内 おらア大きにそこどころだ。サア、親の困窮を救つてくれぬやればねへ、てめえをくれてはおかれねえ。娘、一緒に来い。

トお圓が手を取る。

かや コレ、久内どの、娘を連れて、どこへ行かつしやるのぢや。

久内 されば、吉原にしようか、深川にしようか。

そのモシ、なんでわたしを其やうな所へ

久内 叩き賣つて、この親が食ひ方にするのだ。否でも應でも連れて行くワ。

トおかや、捨ぜりふにて留めるを。久内はお園の手を取つて引ッ立て、行きにかゝる。この時長九郎、

ツカくと内へ入り、附け廻して、久内を取つて投げのけ、すぐに引起していたばるこなしにて

長九 これは舅御様、どうなされました。お危なうござります。

久内 アイタ、、、、。コレ、貴様は二度目の聾の長九郎だな。なぜ舅を投げたのだ。

ト顔をしかめて思ひ入れ。

長九 どう致しまして、聾のわたしが舅御様を投げて、よいものでござりまするか。

久内 それでもたつた今。アイタ、、、、。

ト腰をさすつて思ひ入れ。

長九 それは斯うでござります。お年寄りの癖に、何か娘を捕へて、わつばさつばとなされまするゆる

危ないと存じまして、かばひまするはずみに。……ようござりまする。その痛いところへ、膏藥

を貼つて上げませう。

久内 否だく、膏藥ぐらゐで癒るものか。アイタ、、、、。

長九 ハテ、さう云はつしやらすと、この膏藥を貼つて見さつしやりませ。

ト云ひながら紙入れより小判一枚出す。

サア、これがお前の痛いところには、妙藥でござりませうが。

ト差出す。久内見て、ニツコリと笑ひながら

久内 成る程、こりやア妙藥だ。聾どの、こなたは着婆扁雀より名醫だわえ。併し、一枚では、この痛

いところが全快すればよいが。

長九 ハテ、また貼り替へて上げませう。マア、二三日その膏藥を、貼つて置かつしやりませ。

久内 ナニ、また貼り替へて下さるとか。それは親切、忝いく。どりやく、そんなら、歸りませ

う歸りませう。

その父さん、もう歸りなさんすかえ。

久内 歸つて悪くば、もつと居ようか。

そのようお出でなされました。

久内 エ、其やうに追ひ出す事はない。又ぢきに來るぞよ。それまでこの天蓋と尺八を預かつて置い

てくれい。……イヤ、聲どの、こなたは奇特な人だ。コレ、云はねばならぬ事がござるわえ。決して夜歩きなぞをさつしやるな。この間三浦屋の寮で、大勢の人殺し。その殺し手は權三とやらひよつとこなたを、そんな者の巻添へにでもあはせてはならぬ。コレ、必ず夜歩きをさつしやるな。

ト此やうな事を云ひながら、門口へ出て窺つてゐる。

かや コレ、長九郎、最前から案じてゐるが、會所からこなたを呼びにおこしたのは

その モシ、何の用でござんしたえ。

長九 昨夜山谷の屋根船で

その エ。

長九 イヤ、別して案じる程の事でもござりませぬ。

かや さうかいの。それなれば、母も安堵しました。

長九 ほんに、安堵といへば、もう日が暮れた。見世の灯の支度を

その 云ひ附けて置きませうか。

かや どりや、わしは佛様の、お御灯の支度しませう。

久内 そんなら娘、また来るぞよ。

その アレ、まだ居やしやんすかいの。

久内 イヤ、これは御挨拶。

トかすめたる屋體躰子になり、お園おかやは奥へ、久内は向うへ行きさうにして、思ひ入れして引つ返し、路地の内へ入る。長九郎一人残り、こなしあつて

長九 コレ、荷主がござつた。才助々々、お茶を持つて来ないか。

ト此やうな捨ぜりふを云ひながら、内外を見廻し、思ひ入れ。合ひ方になる。舞臺真中の本墨を上げ

て

モシ、權三様、さぞお氣詰まりでござりませう。大恩寺前の人殺しも

ト前幕の真入れを出し

この真入れの中にある書き物にて、この家の伴半七どのに疑ひかかり、あなたの御詮議は少し薄

らぎましたれば、折を見合せこの所を。……それには幸ひ、この天蓋、尺八。これで人目を

ト久内が預けて行きし天蓋尺八を縁の下へ入れ、思ひ入れあつて

申さば古主の敵たる、あなたをお隠まひするも、どうぞ若旦那權八様と、尋常の勝負をなされまし

た上、討ち討たるゝは互ひの御運、何とぞ古主の權八様に、武士道が立てさせたいわたしが願ひ

こりや申さずとも、あなたの爲にも養父の仇なる權八様。必ずお命全うなされて

ト思ひ入れあつて

さぞ下冷えが致しませうが、これで餘寒を

トそこにある火鉢を床へ入れ

モシ、御飯は後ほど上げまするぞえ。

ト墨を元のやうに直し、思ひ入れあつて

古主の敵を隠まひ置くも、矢ッ張り古主へ忠義の爲。大恩寺前の人殺しも、この貰入れの證據ある上は、雪を墨とも争つて、權三どのを救ふまいものでもなければ、さある時には大恩ある、この家の子息、半七どの、科に科を重ねる道理。こりやアどの道、思案ものぢやわえ。

ト唄へかすめて聖天の鳴り物。向うより源次、ちんこ切りの拵へ其の俵を一俵かつぎ、泣いてゐるお通の手を引き、跡より金毘羅参りの〇、△、白の四天、股引き、誂への箱を背負ひ、わや／＼云ひながら出る。ズツと下がつて半七、尻端折り、頬かむりにて、窺ひ／＼出て來り、花道にて、ためらひある。

源次 コレ、何も泣く事はないぞ。伯父さんが、いま内へ連れて行つてやるッ。

金〇 そんなに泣くものぢやアない。ア、い、子だぞ。

金△ そんなら、その茜屋といふは、向うの内かね。

金〇 アレあの内よ。コレ、もうお前の内はそこだわな。

つうイエ／＼、あそこではない。父さまの所へ、連れていて下され。

ト半七思ひ入れ。

源次 ナニ、あそこではない。成る程、おれも平常あの門口を通るが、こんな子は見掛けなんだが

金〇 それでも迷子札に、しつかりと書いてあるから

金△ さうサ。マア、連れて行つて見さつしやるがよい。わしらも一緒に行きませう。

源次 マア／＼、連れて行つて見ようかね。

ト三人はお通を連れ、門口へ來り

モシ、どなたでもお目にかゝりたうござります。

金〇 モシ、お頼み申します／＼。

ト奥よりおかや、お園出て

かや コレお園、表へ誰れやらござつたぞえ。

そのモシ、どなたでござります。此方へお入りなされませ。

金〇モシ、爰の娘御が迷子になつてゐたから

金△わしらが見附けて連れて來ました。サア、お渡し申します。

ト云ひながら皆々内へ入る。金屋羅参り兩人は、内の様子な、キヨロ、見廻す思ひ入れ。

そのそりやモシ、門違ひでござんせう。私どもの内に女子の子は

源次わしも無いとは思ひましたが、コレ、見さつしやい。この迷子札に、「岩井町茜足袋屋平左衛門孫

娘お通」と書いてござるから、連れて來ました。

かやそりや、似た名はいくらもあるもの。こちらの内に、迷子になりさうな孫というては

長九 お袋様、お待ちなされませ。

ト舞臺へ下りて來て

何にしても、合點のゆかぬ事ぢやが、お前方の連れてござつた娘といふは

源次 この子でござりますよ。

長九 マア、ちよつと迷子札を見せて下さりませ。

トお通の迷子札を、よく見ても

成る程、こりやア「岩井町茜足袋屋平左衛門孫娘お通」と書いてある上に、手跡も覺えの

ト以前の貰入れの文を出し、ちよつと手跡を引合せて見る事あつて

さては違はぬ

そのエ。

長九 コレ、見やお園。この子は誰れにやら、似てゝはないか。

トこれにてお園、お通の顔な、つく／＼見て

その成る程、さう云はしやんすりや、清やかなこの目許といひ、口許まで

かや似たとは誰れに

トこの時半七、抜き足にて、窺ひ、門口へ來り、戸をソツと明け、思はず長九郎と顔見合せ、半七

は外よりシヤンと戸を閉める。

長九 ムウ、すりや、いよくこの子は

かや誰れに似てぢや。

長九 この子の親に。

かやムウ、この子の親とは

長九 モシ、私しでござります。
かやホ、ハ、ハ、長九郎とした事が、あぢやらも程のあるもの。其方夫婦がその仲に、子といふものは
そのござりませぬど……ござりますわいな。
かやヤ、なんと云やる。

ト思ひ入れ。

長九 これはお前方、大きにお世話でござりました。

金〇 そんなら、この子は爰の内の

長九 アイ、娘でござります。

源次 ヤン、それでわしも安堵しました。

長九 コレ、お園、折角娘を連れて来て下されたお方へ、ちよつと酒でも出しやれ。

源次 イヤ、構はつしやるな。わしはこの裏の新道の、貰屋の内へ、毎日々々来ますから、又ゆる

りと御馳走になりませう。

金△ ハ、ア、そんなら百足貰屋といふは

金〇 この裏新道かね。

源次 わしやアその内へ、今、荷を持つて行くのだ。

金△ わしらもその貰屋へ用があつて行くのだが、丁度よい。

金〇 一緒に行きませう。左様なら御免なされませ。

ト兩人暖簾口の方へ行くを

長九 モシ、お前方はどこへ。

兩人 この裏だといふ貰屋へ。

かや ても不慮慮な。商人の見世を

金〇 通り抜けになりませぬかな。これは不調法しました。

金△ でも、茜足袋屋といふからは、よもや、あの半七が

かや エ、何ぢやえ。

金〇 モシ、そんなら爰はアノ、半七どのとやらの内かね。

ト兩人方々を、ウソ／＼見廻す。

その何ぢややら、アタ氣味の悪い。モシ、貰屋なら、外の路地から行かしやんせ。

源次 コレ、おれと一緒に行くがい、わな。モシ、氣を付けて行かつしやるがよい。初午時分は、えて

迷子になるものでござりますよ。

金△サア、そんなら爰はアノ、半七どの、内だね。

ト猶もウツ／＼見廻す。

源次 オイ／＼。そんなら娘御は、しつかりと渡しましたぞや。

長九 これは御深切に忝なうござります。

トかすめたる屋敷囃子になり、三人路地のうちへ入る。此うち半七ばズツと花道の方へ引下がつて道

ひめる。おかや、こなしあつて

かや コレ、長九郎、母はさつぱり合點がゆかね。非人の胤ぢややら、何者の子ぢややら、知れもせぬ

ものを、こちらの娘ぢやというて

そのイエ／＼、なんのその子が非人の胤でござりませう。その子を産んだ親御といふも、大概それとわ

たしも推量。長九郎どの、ようマアお前は、こちらの内の子ぢやと云うて下さんした。モシ、お袋様

こりや是非ともわたしが娘に貰うて、温なう育てねばなりません。あなたの爲にも現在初孫。

かや そりや云はいでも、其方衆二人が娘にすりや、わしが爲にも初孫ぢやが

ト心々の思ひ入れあつて

連合ひの平左衛門どのにも相談せねば

長九 大事ござりませぬ。お園と私しが仲に子の出来ぬ事を、親仁様も平常御苦勞なされましたに、女

房が身腹痛めずに初孫。これと申すも、御開山様の引合せ。この子をお園と私しが、大事に育て

るその時は、半七どのへ義理も立ち

かや エ、なんと云やる。

長九 ヤレ／＼、思ひがけなく私しも、子實を儲けました。コレ、お園、おれは奥へ行って、おまむき様

に、此お禮の看經するうち、この子の親に

そのエ。

長九 サア、お山人形でも買うてやりやれ。

ト合ひ方、時の鐘。門口へこなしあつて、長九郎奥へ入る。

かや オ、もう入り相ぢやさうな。あと早い、灯りを點して

ト思ひ入れ。

そのイエ／＼、わたしがつけませうわいな。

トお園は暖簾口より丸行燈を出し、灯をともし

サア、これからお前の母様は、わたしぢやぞえ。

つう アイく。わしや眠いわいなう。

トおかや行燈の灯影にてお通を、つくづく見て

かや ほんに、見れば見る程どこやらが

ト思ひ入れあつて

成る程、よう似たわいなア。

その それぢやによつて、わたしが娘に。

かや ムウ。すりや、この子を産んだ母といふは、もしやこの頃噂のある、慥かその名も三勝と

その 半七様のその仲に、儲けた娘と推量して

かや 育てる心の夫婦の衆。殊に其方の女子の情、悋氣嫉妬の心も無う。その美しい氣立てをば、あの

勘當した不所存者に、せめて露ほど

ト思ひ入れ、半七も立ち聞きして思ひ入れ。

つう おば様、奚はどこぢやえ。

その 爰はお前の内ぢやぞえ。そして今から、わしを母様と云はうぞや。オ、よい子ぢやの。

つう お前は母様かや。そんなら、乳飲まうく。

その これはしたり、その乳には困るわいの。

トおかや思ひ入れあつて

かや こりや尤もぢやく。コレ、お園、乳を貰ふまでも、なんぞ菓子はないか。手遊びなど買うてや

りやいの。

その アイく、人形町へ行って、よい姉様買うて来てやりませう。

ト何心なく門口を明ける。この時表に窺ふ半七、懐より手振り人形、いろくの手遊びに薬を添へ、

お園が前へソツと出すゆゑ、驚き

オ、こは。誰れやら門口に

かや 何をマア仰山な。

その でも、アレあそこに

トこはく半七を覗き見て

ア、お前は

つう アレ、父様が

かや ナニ、父とは。……ヤ、慥かに我が子の
その モシ。

ト伸び上がるおかやへお通を渡し、門口をシヤンと閉す。おかやはお通を抱き、思ひ入れ。半七門口
に手を組み、皆々よろしくこなし。合ひ方變り、思ひ入れあつて

かや コレ、そこに居るのは何ぢや。

その サ、ありや犬でござりまする。

かや ナニ、犬ぢや。

その アイ。しかも子持ち犬が、その子犬の爲に、ようマア爰へ。

かや そんならこの子の親犬が。コレ、今と云ふ今、産みの親の大神を、思ひ知りをつたであらうがな。

半七 それゆゑにこそ人目を忍び、我が家の門口まで、やうくと

ト思ひ入れ。

その 云うて返らぬ事ながら、最前も内外の噂。あの美濃屋の三勝どのと、ひよんな事仕出して、その身

ばかりか、東西わかぬこの子にまで。それで足らいで、親御様へも御苦勞かける半七様。わたしも

お前に怨みの數々、ほんにこれまで露ほども、色に出しはせぬけれど、三勝どのに見返られ、枕

淋しき寢覺めの夜、よその大夫の睦まじう、花見遊山を見るに附け、羨やましさはいかばかり。

わたしぢやとても女子のはし、愒氣の仕やうも、かこつのも、知つてはるれど不束かな、この身

に恥ぢて心にばかり、泣いて表面は美しく、添うてるたのも若しひよつと、お前の心の捨て情け

にも、不便な者とこれ程も、思ひ直して下さんすかと、はかない事を樂みに、長い月日を待つう

ちに、舅御様の御勘當。頼みの綱も切れ果て、風の便りもいつしかに、善からぬ耳のみ積り

積つて、たうとう其やうな身の上に、なぜになつては下さんした。モシ、この子の事は、わた

しがきつと預るほどに。サ、斯ういふうちにも心が、早うこの場を、行て下さんせ。

トよろしくこなし。半七思ひ入れ。おかや、こなしあつて

かや 子を思ふ、その恩愛のわりなさは、追へども去らぬ煩惱の、柱をめぐる親犬の、心は誰れしも……

人目にかゝらばどのやうな、憂き目に逢はうも知れぬほどに、サ、早うどこぞへ逃けてくれ。

半七 この罰あたりの畜生めを、それ程までにかばうて下さる親の慈悲。心は同じこの身にも、それな

る餓鬼めを頼まうと、面おし拭つて

その それは氣遣ひさしやんすな。あの子を産んだ三勝どのになり代り、わたしが大事に育てる程に、

必ずともに安堵して

ト思ひ入れして

オ、行燈の灯し火。

かや 命も消えぬ其うちに、サ、早く行てくれ。

ト半七を向うへやりたきこなし。半七心を残し、花道の方へ行きかゝる。向うを見て

半七 南無三、向うへ親仁様が……併し忍んでよそながら、親子一世の暇乞ひ。

そのエ、いまはしい、其やうな事を

半七 どうで始終は細つた首。

かや エ、また其やうな事を……コレ、親仁どのに、其方の影を見られては

そのモシ、暫しのうちはお許しなされて

ト半七を内へ入れる。

つうアレ、父様が

かや コレ。

トお通を半七に渡す。半七サツと抱き締める。

わしや何にも知らぬが佛

半七 現在親にも逢はれぬやうな
その身状もお前の心から。モシ、半七様
半七 お園、よく幕を切れよ。

トこなし。唄になる。お園はお通を抱いた半七を、衝立ての蔭へ忍ばせる。おかや思ひ入れ。この唄
をかり、向うより平左衛門、老けたるこしらへ、羽織ばつち、尻端折り、杖を突き出て来り、内へ入
りながら

平左 戻つたぞ。

ト兩人ウロくして

かや オ、親仁どの、なぜ其やうに早う戻らしやつたぞいの。

平左 なに早い事があるものか。コレ、お園や、何をウツカリ、茶でも湯でも一つくれいよ。
そのハイノ。

トうろたへて、火入れを茶臺へ載せて差出す。平左衛門知らずに、これを飲まうとして
平左 アツ、ツ、ツ、ツ。あんまり沸え立つた茶を

トよくく見て

こりや何ぢや、わしに途方もない茶を飲ませやうとしをつたな。
かやほんに、そりや火入れぢやないかいの。
平左 コレ、鼻のさきを火傷して、ひりくするぞえ。

トこれにて氣の毒なる思ひ入れ。

そのオヤ、わたしとした事が、そつつかしい。お免しなされませく。さぞマア草臥れたでござんせうな。

平左 イヤモウ、草臥れた段ではない。コレ、その鹽へ水汲んでくれ。

そのお御足をお濯ぎなされますなら、湯を汲んで参りませうか。

平左 イヤく、水の方が、ひいやりとよからう。

その左様なら、直ぐに爰でお洗ひなされませ。

ト鹽へ水を汲む。平左衛門、足を洗ひながら

平左 コレマア、お婆も、嫁女も聞きやれ。今日も道場参りの講中の噂。この親仁が以前勤めてゐた、

白井兵左衛門様を、殺して立退いた権三といふ奴、鈴ヶ森の仕置き場から逐電して、又ぞろ三浦屋の寮で、大勢の人を切つたとやら、世間には、さまざまの噂がある。矢張りその晩の事ぢやけ

な。あの悴の半七が、三勝といふ女を切つたとやら、突いたとやら。それゆゑお上より厳しく御證議なさるとの事。勘當しても、血を分けた悴。悪い噂を聞いた時の心のうち、マどのやうにあらうと……イヤ、赤の他人のあの半七、どのやうな憂き目に逢はうと、構うた事でもなし。只大切なかゝり息子といふはあの長九郎。コレ、お園、二人が仲に、なぜ孫をば拵へて見せぬぞ。

その舅御様とした事が、何をマア、じやらくくと

ト思ひ入れあつて

ほんに、お喜ひなされませ、わたしや俄かに子が出来ましたぞえ。

平左 何と云ふ。アノ孫が、一夜の内に出来たとか。

かや 出来た哉かいなう。それは善い娘の子でござるわいの。

平左 ハ、ハ、ハ、ハ。お婆もよい年をして、何を阿房つくすぞいやい。なんほ今の若い者が器用ぢやと

いうて、一夜のうち

その出来たその子を舅御様、只今お目にかけてませう。

ト合ひ方になり、お園、衝立ての蔭へ行き、お通を抱き、平左衛門の側へ行き

コレ、お通や、其方のお祖父様にお目にかゝり、可愛がつてもらひませうぞ。サ、お側へ行き

やく。

ト平左衛門の方へ突きやる。

つうアイノ。お祖父様、可愛がつて下されや。

平左 オ、孫とはわれかく。これがママ、あの二人が仲に、俄かに出来た

ト思ひ入れあつて、引寄せて、お通の顔をサツと見てこなし。迷子札手にさばるゆゑ、気が付き、こ

れを見て思ひ入れあつて、

「岩井町茜足袋屋平左衛門孫娘お通」……ハテ、この札を書いた手蹟、勘當した忤めに、よう似た手蹟。殊にこの子が面差し恰好、どこやらが、あの不所有者めに、見れば見るほど

ト思ひ入れ。この時衛立ての上より半七覗く。平左衛門フツと顔を見る。半七隠れる。平左衛門こなしあつて

ハ、ア、そんなら大方この家を見込み、嫁女や婆をたらしこみ、捨て子の押賣りか。この親仁も、買うてやりたいものなれど、盗人、人殺しの胤ぢややら、どうで碌な奴の拵へた子ぢやあるまい。貰うた子ならば返すがよい。拾うた子なら捨てしまわれ。お婆、嫁女、馴染まぬうちに、捨ててしまわれ。

ト衛立ての蔭へかけて、よろしく思ひ入れにて云ふ。

その左様でもござりませうが、長九郎どのも、二人の子にして育てようと、折角喜んでるやしやんすもの。

かやそれノ。老いては子に随ふとやら、今更どうも長九郎に

平左 ナニ馬鹿な。餘の事は兎も角も、この事ばかりは、長九郎が得心でも、この親仁が不承知ぢや。

ならぬ事ぢや。わいらが捨てずば、わしがその餓鬼

トお通へ立ちかゝる。この時奥より長九郎、着流しの上へ、門徒の肩衣を引つ掛け、誂へのお文様を入れたる箱を持ち、出て来り、平左衛門を留めて

長九 親仁様、その娘を育てましても、苦しうはござりますまい。

平左 こりやア聳の長九郎、この子を育て、も大事ないとは。

長九 ハテ、これ程までに育てました娘の子を、誰れがくれませうぞ。又捨てる者もござりませぬ。これぞ誠に御開山、上人様より長九郎に、お授けなされた、如來様の御再誕、近う寄つて親仁様、初孫育て、つかはされませ。

平左 すりや、どうあつても其方衆夫婦は、あの子を、我が子に

そのハイ、致しますが私しどものお願ひ。モシ、鬮御様、どうぞあなたの初係に。

平左 それ程までに、夫婦の者が云ふ事なら、孫にせまいものでもないが、この子の實の父親から、持参の品が添ふならば

長九 孫になされて下さりますか。

平左 随分するぢや。望む持参を添ゆるなら、品によつたら勘當も

かや免して、逢うてやらつしやりますか。

そのして、その持参といふは鬮御様

長九 何がお望みでござりまする。

平左 持参に望むは、天國の短刀ぢや。

長九 エ。

平左 長九郎、こなたとわしは、年こそ違へ古册輩、古主白井兵左衛門様、お家の退轉は、天國の短刀

紛失ゆる、その短刀だに出るならば、若旦那那權八様、本地に歸らしやつて、お家再興あるとの事。

聞くより親仁、大恩ある兵左衛門様へ御奉公に、せめて短刀の手がかりなと聞き出さうと、心を

つくせど、いつかなく、老朽ちてせうどはなし、譬への通り蛇の道は蛇、こんな物のかゝり

所嗅ぎ附けるは、結句わる者仲間が賢いもの。ア、コレ、その子の親めも、藝者狂ひに身が入

つて、果てはお上のお尋ね者になるほどの、十分の一を心を用ひて、その天國を尋ね出し、若旦那

那權八様に差上げてくれたなら、この親仁が死んで行つた時、大旦那兵左衛門様へよい土産、又

この世では子の罪科がこの身に報い、たとへ親の首へ繩附けられても、さらしくいとほぬ、勘當

免してやらうもの……イヤその娘、祖父が孫にて可愛がつてやらうもの。そこに心の附かぬとい

ふは、その子の親めも、馬鹿な奴ぢやなア。

ト衝立ての蔭へ思ひ入れにて云ふ。長九郎こなしあつて

長九 すりや、その天國の短刀を、尋ね出すその時は……此ほど隅田の向う河岸、舟の中より計らずも、

短刀もろとも、添へて投げたる女の書置き。

半七 ヤ。

ト衝立ての蔭より窺ふ。

そのモシ。

ト押へて

すりや、その時に

長九 思はず手に入る女の手蹟。これぞ即ちお文も同然。親仁様、如來様より書き物添へて、初孫に下

されたその娘、是非ともお貰ひ申さずは

平左 ナニ、如來様より書き物添へて、アノ娘を

長九 左様でござりまする。御開山様よりお添へなされたお文様、今これで読み上げまする。親仁様、

そこらあたりにいる人も、よう御聽聞あられませう。

ト合ひ方變つて、件の箱の中より、前幕の短刀に添へし三勝の書置きを出し、うやくしく思ひ入れ

あつて

「書置きのこと。」

皆々 ヤア。

平左 コレ、長九郎「書置き」といふお文様があるか。

長九 ござりまする。まづ、神妙に御聽聞ななされませ。われやさき、人やさきとは世の中の習ひ

これまでお目にかゝり申さず候へども、私こそは本庄助太夫と申す者の娘、勘當の後、其許様

の古主、白井兵左衛門どの、養子、權八どのに討たれ給ふの由、さすればこの三勝とは敵同士、そ

の上お園様といふ誠のお内儀様のある男を、横取り致し候ふ罰にて、添ふに添はれぬ義理詰めと

なりしゆゑ、死なんと覺悟きはめしところ、天國の短刀だにお手に入る上は、御勘當もゆり候ふ

との事、承り候ふ折柄、宅兵衛どの、持つたる一腰、誠の天國と見受け、それを手に入れんと、

心に思はぬ愛想づかしも、果てはお手にかゝり申す覺悟にて候ふ。この劍は、私し家にて尋ね

る品に候へども、親よりも、夫を大切に致せと申す致へを守り、一腰は半七様へお渡し候ふまゝ、

これにて御勘當ゆり候はゞ、お園様と末ながうお添ひ遊ばし、その節はお通こと、くれぐ

よろしく頼み上げり、申し上げたき事は山々候へども、何事も涙にくれ、惜しき筆とのり、

めでたくも、茜屋御兩親様、半七様へ、三勝より。……南無阿彌陀佛々々々々々々。

トよろしく思ひ入れ。此うち半七、衝立ての蔭にてこれを聞き、こなしあつて

半七 すりやアノ、船の中にて投げたる品は、尋ぬる短刀。

長九 血汐に残る手形の印文、これぞ美濃屋の三勝が

ト書置きの末に、血の附きたる手にて摺りし痕あるを、ちよつと見せる。

そのすりや、それ程までに、男を思ふ三勝どの。

かや可哀や邪慳の刃にて

半七 知らぬ事ゆゑ、やみくと

ト思ひ入れ。

平左 ヤ、悴か。

ト半七隠れる。

長九 ア、モシ。……あなかしこく。サア、親仁様、此お文様の御誓言では、是非ともその子は、あなたのお孫に。

平左 成る程、古主の白井権八様へ、差上げたその上にて

長九 お約束の勘當をお免しなさるが、即ち彌陀の御本願。私し事も、以前は白井兵左衛門の小侍ひ、申さばあなたと古朋輩。お家退轉のその後、以前のよしみにこの家を使い、侍ひやめて足袋屋の手間取り。御實子の半七どのが、家を出なされたその後、これなるお園と夫婦になつて、この跡式を立つてくれいと、宿老はじめ御親類を以て、再三のお頼み。たつて御辭退申すのも、大恩ある今の主人、あなたの心に背くも如何と、表向きの祝言は致したなれど、ついに一度の枕さへ、かはさぬ事は女房が證人。床の中では帯締めて、寢てくたびれて起きての氣のぼし。心が味になる時は、こゝが大事と一心に、南無阿彌陀佛、御開山、願ふところは御子息の、半七どのを呼び返し、添はせてやりたいわしが願ひ。この長九郎は足袋屋の手間取り、悪所遊里はどちらや

ら、百の女郎もこの年まで、求めても見ぬ野暮者ゆゑ、相談相手にならぬのか。コレ、わしと相談して下されたら、三勝どのをやみくと……サア、我が内の人にも隠れる程な、暗い身にはせまいもの。貧乏しても長九郎、わしも男ぢや、男ぢやわいの。

ト衝立てに向ひ、よろしく思ひ入れ。半七はお通の顔をサツと見て

半七 只この上の情には、偏へに娘が成人を、頼むは一人へ。ア、子を持つて知る親の恩

平左 今の骨身にこたへをらうが。

半七 それゆゑせめて兩親に、これがこの世の

ト衝立越しに顔を出し、サツと思ひ入れ。この姿獄門と見ゆる體。

そのアレ、いまはしいその姿

かやその身の果てを

平左 蟲が知らすか。

つうアレ、父様が

長九 コレ、父とはおれぢや。必ずともに

かや 初孫ながら半七が

平左子で子にあらぬ悪縁は
かや血を吐く思ひ、親仁どの。

トお通を抱きながら、思ひ入れ。
平左 どりや看經を……しまはうか。

ト衝立ての方へ思ひ入れ。半七伸び上がり見る。お園これを隔てる。おかやはお通を抱きしめ、長九郎と顔見合せ、思ひ入れ。双方よろしく、唄になり、平左衛門先きに、おかやお通入る。跡に長九郎お園残る。衝立ての蔭より半七、ツカク出て

半七 この世の名残り、長九郎どの

長九 ヤ。

半七 頼みました。

ト門口へ出にかゝるを、お園、突き廻してよろしく留め

そのア、コレ、お前が出ては

長九 おれが心も水の泡。

半七 それだといつて

トまた行きかゝるを、お園留めて

そのコレ、うろたへてか半七さん

長九 ア、コレ、その名を迂濁に

ト思ひ入れあつて

とて返さぬ籠の鳥、懐ろに入る窮鳥は、狩人さへも捕らぬとやら。この長九郎が身に引受け、その身の科もやすくと

半七 ヤ。

長九 コレ、安兵衛々々々。

そのモシ、安兵衛とはえ。

長九 ハテ、野暮な。八文や九文。半七といふ名はお上のお尋ね者、それを夫婦が義理立てして、この家へ隠まひおく時は、舅御様へもお咎めが、かゝりや繋がる血筋の縁。ぢやによつて、そこにゐるのは、律氣一遍足袋屋の手間取り、安兵衛としておかう。イヤサ、たつて居るのが、よさうなものぢやてな。

ト兩人へ呑みこませる思ひ入れ。

その成る程、さうでござんす。そんならぬしは、足袋屋の手間取り、安兵衛どの。
長九 コレ、その仕掛けた仕事を、片付けてしまわれ。

ト半七思ひ入れあつて

半七 ハイ、旦那様、左様ならこの半沓の方を片付けませうか。イヤ、この晒しの方へかゝりませう。
そのイエ、疵持つ足のぎえんには、晒しといふはどうやら気がゝり。

長九 それ、折りを見合せこつそりと、遠い田舎へ行く人に、注文された草鞋がけ。マア、その方
をしてもらはう。

ト思ひ入れ。

半七 左様なら、どりや一精やらかさうか。

ト足袋を縫ひにかゝる。長九郎思ひ入れあつて

長九 コレ、お園、わしは風をひいた様子、蒲團を貸してくれ。

そのアイ。

トそこにある蒲團を着て、真中へ坐る。この時前幕に拾ひし貰入れを落し置く。

モシ、お前、風ひいてなら、酒一つ飲ましやんせいなア。

長九 成る程、それもよからう。いつもの通り熱燗にして、ちろりを持って来やれ。

トお園ちよつと暖簾口へ入る。直ぐに銚子杯を持ち出て、落ちてある貰入れを拾ひ

そのモシ、こりや見馴れぬ貰入れ。

ト出す。半七見て

半七 ヤ、そりやそれ、いつぞや三浦屋の

長九 アイヤ、三浦屋で誂へて拵へた、そりや人の届け物ぢや。

そのさうでござんすかいな。派手な好みの貰入れ。

トあちこち見て、中にある文を見付け

何やら中に書き物が

半七 そりやソレ、おぬしへ。

そのエ。

ト半七取りにかゝるを、長九郎ちよつとさゝへて

長九 そりやア大方受取りであらう。三浦屋なら、定めて廉く上げたであらう。ちよつと讀んで見やら
ぬか。

そのイエ〜、こりや受取りぢやござんすまい。
長九 マア、なんであらうと読んで見やれ。
そのアイ。

ト不思議さうに文をひろげ

「わざ〜申し入れり〜、よんどころなき世の中にて、あかぬ仲を引分け、又ぞろ新様な事申し遣はし候うては、おさけすみも恥かしく候へども、我れら不料簡にて今の身の上、悔むに詮方なく、いろ〜の附き合ひ、又は友達の義理、その外引くに引かれぬ男づくにて、金子の入用御座候ふ間、別れしそもじ様へ無心申し入れ候ふこと、よく〜の仕儀とお察し、少しなりとも御都合なし下さるべく候ふ。」

ト読みながら思ひ入れ。半七、それを讀んでは悪いといふこなしあるべし。

こりや見覺へのある手蹟。慥かにお前の

ト半七へ思ひ入れ。半七、讀むなといふこなし。

長九 ハテ、お家長尾にさ山にた山、流儀によつて似た手はいくらも……イヤ、それは中々面白い手紙ぢやわえ。サア、その後を、聞きたい〜。

そのぢやというて、わたしやどうも……何ぢややら、讀み憎い手ぢやわいな。

長九 ナニ讀み憎い手ぢや。外の流儀は兎も角も、その手蹟がナニ讀み憎からう。そんなら安兵衛、讀んで聞かしやれ。

半七 ナニ、おれにその文……イヤ、私しには、その手紙は

長九 讀めぬ事があるものか。コリヤ、てめえは主人の云ひ附けを背くのか。

半七 サア、背きは致しませぬが

長九 そんなら讀んで聞かしやれ。

半七 これは又迷惑な。

トよんどころなく讀みにかゝる。

ナニ〜「又々承り候へば、只今にては長九郎と……イヤ、兵九郎とやらいふ男が入夫に參り候ふ由、小糠三合のたとへ、よく〜思ひ合つた仲と存じ候ふ。さぞ〜毎晩お楽しみ、あまり聲を可愛がり過ぎて、肥で蠅を追はせぬやうになされかし」。

ト半七せつなきこなし。お聞、いろ〜こなしあつて、我れを忘れて

そのエ、なんのマア、神佛かけて、わたしや否らしい事は露ほどもないものを、そりやお前の邪推

といふもので

長九 これはしたり、お園、そりや何を云ふのぢや。黙つてゐやれ。……安兵衛、その後は

半七 サア、この後は、どうも私しには

長九 なぜ讀まぬのぢや。

半七 春先きのせるかして、目が霞みまして

長九 よし、さういふ事ならおれが

ト取りにかゝる。半七ウザ／＼するを、長九郎取つて

なんだ。臆で蠅を追はせぬやうになされかし。この間ちよつとよそながら見受け候へば、随分よ
い男、顔中が目の玉かと存じ候ふ。

トこなし。兩人せつなきこなしにて、無性に咳をする。

ハテ、夥しい咳だな。

半七 イヤモウ、急に風をひいたので。エヘン／＼。

長九 お園もひいたか／＼。

その 只今ひきたて、ござんす。

長九 ムウ、今日は風ひきの誂へが出来るさうだ。ドレ／＼、この先きを。……顔中が目の玉かと存じ候

ふ。いづれ入り聲といふものは、間抜けじみたものにて御座候ふ。元木にまさる裏木なしとやら

お心あらば、元のやうになりたく候ふ。いづれ／＼聲の長九郎とやらは、お拂ひ箱にて、我れら
の頼み、御都合下さるべく候ふ、めでたくも。……ハ、ア、こりやアどれからどれへ遣はした
文ぢや、味な事を書きをつたわえ。ドリヤ、宛て名を讀んで

トこなしあつて

半七 ア、モシ／＼、どうぞ宛て名は

その もう堪忍して下さんせ。

ト兩人無性に汗を拭ふ。長九郎こなしあつて

長九 ハ、ア、二人ながら一汗かいたな。イヤ、この俵屋では、どんな風でも抜けるであらう。ハ、ハ、ハ、

ト文を引裂き捨てる。半七思ひ入れあつて

半七 イヤモウ、此やうなせつない事は、手間取り安兵衛も一生覚えませぬ。

その わたしですんでに、逃げ出さうとしたわいなア。

長九 イヤ、てめえが逃げ出すより、顔中が目の玉の入り聲は、お拂ひ箱にならねばよいが。

そのアレ、もう堪忍して下さんせ。

半七 ハ、ハ、ハ。誠に面目次第も……とはいへ、どうして又その文が、アノこなさんの

ト思ひ入れ。合ひ方になる。

長九 所は吉原近所なる、大恩寺前の三浦屋の、寮で多くの人殺し、その時わしが手に入るこの品。尤もその夜の騒動は、権三が業に極まれど、この代物の出る時には、お上の疑ひ、その身に科を重

重の、善からぬ噂を聞くも氣の毒。最前も會所へ呼ばれて、こなさんの詮議。

そのすりや、その品が人殺しの場所に、落ちてありしゆゑ

半七 かけかまはぬ罪科まで、身にふりかゝるも野晒しが、これまでつくす悪事の報い。めぐりくつて

天の網。

長九 半七ならぬ、こりや外にと、云ひ譯するその時は、いよく罪は権三どの。サア、誰れを敵と討

つべきと、義理と忠義の二道に

その心をつくす長九郎どの。して、人殺しの證據なる、この一品の納まりは

半七 所詮のがれぬこの身の罪。科人の咎めも身に引受け、せめてはそれをこれまでの

ト立ち上がるを、長九郎留めて

長九 コレ、こなたが名乗つて出る時は、今は格別、その以前は、奉公人の長九郎、主の息子を見殺し

と、世間の人の口の端より、勘當されても實親の、平左衛門どのへ長九郎が、なんと面が合はさ

れう。急かすと時節を、半七どの……イヤ、手間取り安兵衛。マア、一つ飲まつしやい。

ト杯を出す。

そのモシ、あのやうに云はしやんすほどに、必ず短氣を

半七 そんなら旦那のお詞背かず、サア、一つ戴きませうか。

長九 サア、氣を詰めずに爰へ来て

ト杯を取上げる。

半七 お酌いたしませうか。

ト長九郎、半七の酌にて一つ飲んで

長九 イヤ、これは爛さまで、とんと冷のやうぢや。

そのちよつと爛つけて来ようかいなア。

長九 イヤ、ほかくするから冷もよからう。これはてまへへ

そのわたしへかえ。

ト手酌にて飲まうとするを

長九 此方へ寄越しやれ。

そのこりや憚りでござんす。

ト長九郎の酌にて、お園一つ飲んで下へ置く。

長九 折角呼び附けて、水入らずの酒盛りを、見せて置くのも受け憎からう。コレ、その杯は安兵衛へ。

そのそんなら一つ上げるぞえ。

ト半七へさす。長九郎酌をする。半七、捨ぜりふにて一口飲んで下へ置く。長九郎こなしあつて

長九 ア、コレ、何ぞ肴を。

そのちよつと何ぞ見て来ようかえ。

長九 イヤ、これにい、肴があるわえ。

ト思ひ入れあつて

安兵衛、これを肴にしようかえ。

ト懐中より、前幕に手に入りし天國の短刀を差出す。半七これを取つて思ひ入れ。

半七 ヤ、これぞ尋ぬる天國の

長九 サア、その短刀を權八どの、

そのお手へ渡して舅御様の

半七 勘當ゆりるその時は

長九 二人は元の

ト兩人へ思ひ入れあつて

元の手間取り長九郎、われに渡せしこの天國。

その少しも早う權八様へ

半七 渡した上にて

その親御の勘當、

半七 所詮この身は

ト思ひ入れ。この時下座より久内先きに、藤馬、ぶツ裂き羽織、絆纏股引き、大小にて、黒天の捕り手四人を連れ出て来り、門口に窺ふ。半七お園、聞き耳立てる思ひ入れ。

そのモシ。

ト嘆く。

半七 心を付けやれ。

ト短刀を持ち、こなしあつて、長九郎半七、ツカノと上の障子屋體の中へ入る。この時門口より

久内 人殺しの野晒し半七、慥かにこの家に

藤馬 者ども、召捕れ。

捕手 ハア。

ト皆々内へこみ入り

動くな。

トお園を取巻く。

そのア、モシ、お役人様、何ゆゑあつて此やうに。

藤馬 何ゆゑとは、最前も會所で聲の長九郎に渡した、三浦屋の人殺し跡に、落ち散りあつたは、この家の

俵半七が貰入れ。まつたその夜山谷堀にて、藝者三勝を手にかけてるも、半七なりと慥かな訴へ。

そのでも三浦屋の人殺しは、權三なりと世上の噂。

藤馬 いかにも權三の業なりと、目代へ訴へ。それゆゑ彼れを、召捕らん爲、出口々々へ組み子をくば

れば、所詮のがれの籠の鳥。先づそれよりは、この家の俵 隠まふ半七、きり／＼爰へ、出しを
らう。

そのモシ、お役人様、慥かな訴人と仰しやりまするが、以前の連合ひ半七どのを、隠まひまする位
なら、何しに親御も勘當を

藤馬 キリ／＼出さねば踏み込んで、二階物置き床下まで、家探しせうか。

そのサ、それは

久内 但しは爰へ半七を差出すか。

そのサ、それは

皆々 サア／＼

藤馬 者ども、踏んごめ。

捕手 ハア。

ト奥へ踏んごまうとする。この時奥より長九郎、ツカノと出て

長九ア、イヤ、お役人様、その人殺しは私しが訴人いたしませう。まづ／＼お待ち下さりませう。

久内 こなたは入夫の長九郎どの。人殺しは外にあるとな。

長九 いかにも外にござりまする。

藤馬 して、その人殺しは何者だ。

長九 餘人ではござりませぬ。即ち斯く申す、この長九郎でござりまする。

久内 ハ、ハ、ハ、コレ、長九郎、あんまり人をたわけにするな。三浦屋の人殺しといひ、山谷堀

にて三勝を切つたのも、なんの恨みでこなたの仕業。その人殺しこそ權三、半七。

長九 イヤ、どのやうに云はしつても、その人殺しは長九郎。よし私しでないにもせよ、我れと我が手

に名乗つて出たる科人を、一應お引きなされずば、お上の掟が立ちますまいがな。

藤馬 ムウ。何は兎もあれ人殺しと、名乗つて出でたる長九郎、彼れを召捕り、拷問なすその時は、誠

の人殺しも分明ならん。

長九 そりやあなた方の御勝手次第。矢がら鐵砲ぶりく責め、どんな責め苦をうけても、その人

殺しは長九郎。いざ代官所へお引きなされて

そのすりや、どうあつても長九郎どの、その人殺しはこなさんが

長九 名乗つて出れば古主へ忠義、二つには、この家の子息半七どもの

そのたとへ枕は交さずとも、假りにも夫と名を呼びしを、義理と忠義に

長九 しがらむ縄目。

そのそりや、それほどまでに……ほんに神とも、佛とも

長九 コレ、なんほ足袋屋の職人でも、恩は命で返すのぢや。

ト久内思ひ入れあつて

久内 慥かに下家に

ト壘へかゝらうとするを、長九郎立廻つて久内を引据ゑ、その上へ乗りかゝり

長九 お役人様、イザ、お引きなされて下されませう。

ト手を後ろへ廻す。お園「モシ」と寄るを、藤馬隔てながら繩さばきする。この見得、時の太鼓にて

道具廻る。

本舞臺、三間の間、二階づくりの煙草見世、柿の暖簾、百足の疊描き。こゝに竹村の艾、小田原外郎
の取次ぎの札を掛け、下手に國分舖山荒切りなぞ書きし障子。積みし臺の上に煙草の箱。門口の外丸
井戸、朝鮮矢來、すべて隣家の體。曲撥にて道具とまる。

トすぐに掠めし聖天の鳴り物。こゝに以前の〇△わめきある。お勝争ひあるを、煙草屋權兵衛(實は
丹助)立ちかゝりある。古鑑買ひの助八、ちんこ切りの源次、なだめてある見得。

○ 斷落ち者だから連れて行く。小紫を、爰へ出せ。

△ 出さねえと、爰の亭主はかどわかしたぞ。

兩人 小紫を出せ。

權兵 やかましえわえ。三浦屋の寮で、小紫の方から頼まれたから連れて来たのだ。それをかどわかし

だとは、何を吐かすのだ。

助八 コレ、てめえ達もそんな形をして来るから、人の氣が立つワ。岡場所の玉ではなし、吉原の

事だ。眞面目に云ふがい、ワ。

○ さう云ひなさんな。金毘羅参りの眞似をして来たから嗅ぎ出したのよ。

△ 物貰ひの面で、足を附けた百足煙草屋。揚げて来た小紫を

兩人 出してもらはう。

かつ モシ、お前方は何事か存じませぬが、わたしや爰の亭主の丹助どのに捨てられました、女房

でござりまするわいなア。

源次 コレ、順禮さん、待ちなさい。爰の亭主は先度から、女房はねえけな。そりやアお前、門違ひで

あらうによ。

かつ おきなさんせ。十年十五年逢はずにゐたとして、娘まで産んだ女房が、男の顔を忘れてよいものか

え。コレ、丹助どの

權兵 やかましいわえ。若い時には、女房を置き去りにするは、いくらもある習ひだワ。おれもこの見世

へ引ッ越し早々、順禮嬢アと金毘羅参りに怒鳴られては、外聞が悪い。サア、出て行きやア

が行きやアがれ。

○ ナニ、外聞が悪いも凄まじい、爰の亭主は、この頃まで、非人だわえ。

△ 外聞も當分もあるものか。てめえは非人の、足洗ひだワ。

權兵 なにを。非人ならどうする。うぬら、去しやアがらねえと

ト煙草庖丁を振上げる。助八留める。二人は外へ逃げ出し

兩人 うぬ、足洗ひを食め、どうするか見やアがれ。

ト喚きちらし、路地へ入る。源次は着物を後ろ前に着てゐて

源次 エ、願人のくせに、とんだ奴等だ。

助八 コレ、お前、なぜ後ろ前に着てゐる。

源次 エ、これかえ。今日はわしが年日だから、灸を据ゑてもらはうと思つて。

権兵 そりやア誰れに据ゑてもらふのだ。

源次 奥へお前が連れて来た、小紫さんに据ゑてもらふ氣サ。時にあのおいらんは、薄ッべらな寝巻き一枚でゐるなから、さぞ寒からうと思つて、幸ひ近所の息子が、假り宅の女郎にやるといつておいた仕掛けがありやしたから、持つて来て着せやした。そして又、先刻あのおいらんが、斯うしてゐるも氣が盡きるから、草双紙でもないかと云ひなされるから、わしが氣をきかして、大屋さんから慰みに、琴を借りて置きやした。こいつは中三ものだね。

ト琴を出して見せる。

権兵 いゝ氣な男だ。煙草切りの内で、琴を弾いてたまるものか。踏み折ると悪い。二階へでも上げて置かッし。

源次 オット、呑みこんだ。

ト琴を二階へ持ち行く。

助八 イヤモウ、吉原の騒落ちと聞くと、誰れも頼まねえに、今のやうな奴等が……イヤ、そりやアのけて、あの小紫は、こなさん返すのか、返さねえのか。

権兵 返す氣だが、それも三浦屋の亭主が、禮を云つてくれればよし、わしも商人だ、女郎子供を引き込



んで、どうするものか。……コレ、てめえもいゝ加減に歸られねえか。

かつ イエ／＼歸りませぬ。コレ、お前はマア忘れえもさんすまい……モシ、お前方も聞いて下さりませ。わたしやさるお屋敷に、この人と一緒に奉公いたしてをりまして、行く／＼は夫婦にもならうと、若い時といふものは、身のいたづらに懐妊いたし、そのマア身重なわたしを捨て、斷落ち致しましたわいなア。

助八 そいつはとんだ話した。

権兵 エ、昔の事を云ひ出して、鼠が笑ふワ。いゝ加減にしやべれ。

かつ しやべつてもようござんす。……それでもマア御方便なもので、そのマア苦勞の中でも、やすやすと産み落しました娘の子。それを旦那様がお育てなされて……モシ、お聞きなされませ。有り難い、マアすぐに娘になされて、名も八重梅とお附けなされ、只今では、御主人様の娘御ぢやわいの。

ト権兵衛これを聞いて思ひ入れ。

助八 そいつは仕合せな事だの。

かつ そのマア御恩のある旦那様の、御祝儀なさるゝ百足丸といふ手槍を盗んで、お前、駈落ちさんし

たぞえ。

トこれを聞き、助八思ひ入れ。

サ、わたしやこなさんに用はないが、こなたの在所が知れ、ば、旦那様のお頼みなされた、あの槍を持つて行かには、御恩報じがならぬわいの。八重梅といふお子は、お前の娘ぢやわいの。サア、その槍を下さんせ。持つて行かにはならぬ。

ト腹立て、云ふ。權兵衛「さては八重梅は娘か」といふ思ひ入れ。助八こなしあつて

助八コレ、かみさん、さう云つてもお前、過ぎた事を云ひ出して、そりやア誠に後の祭りだ。なう、權兵衛どの。

權兵衛打つちやつて置きねえな。十五六年も過ぎた話を、今時分に、大べら坊め。

かつアイ、阿房ぢやによつて、此やうな目にあひますわいなア。

權兵衛やかましいワ。行きやアがれといふに。

トお勝を門口へ突き出す。

源次モシ、さう聞いては、わしらも萬更聞き捨てにはなりません。コレ、古金屋さん、斯うしやせう。此かみさんを、わしが内へでも連れて行きませう。

權兵衛なにサ、打つちやつて置かッせえよ。

かつ捨て、置けとは、てもマア邪慳な。

源次ア、モシ、マア、わしが内へ。サア、あゆびなさい。

ト背負ひし革籠や杖笠までも持つて、お勝をいたはる。

かつこれはマア、お前のいかいお世話になりまするが、コレ、丹助どの、娘の世世と聞いて、また無心になぞ行かんすな。コレ、それにしても、旦那の手槍を

權兵衛エ、知らねえわえ。

かつソレ其やうに

ト立ちかゝる。

源次ハテマア、あゆびなさいよ。

ト四ツ竹節になり、お勝をせり立て、二人向うへ入る。

權兵衛エ、とんだ交ぜつけえしがうせた。

助八コレ、それでも貴様が娘は、屋敷のお嬢様

權兵衛あの女めがしやべつたが、産みの娘は屋敷の養女。

助八 仕合せ者は貴様ばかり、コレ、仁助、足を洗つて唐犬權兵衛、以前が丹助。

權兵 これで丁度三度の改名。貴様の頼みで、半七が母と偽り、三勝のあの縁切りがうまく行つたが、

併しあの子も生まじめに、屋敷にゐたら本庄の奥の娘御、それが紛れて藝者の三勝。白井の若黨

平左衛門、しかも隣りの茜足袋、その子の半七、敵同士、それゆる縁を切らさうと、思つた事が

今更に

助八 藝者殺しのあの半七。そりやア格別、今聞いたおぬしが取逃げ、駈落ちの手槍といふは

ト風呂敷の中より槍の穂先きを出し

これぢやアねえかえ。

ト差出す。

權兵 ヤ、そりやア百足丸。どうして貴様の

助八 鈴ヶ森にて拾つたが、道理で權三がよみがへり、皮肉の間を除けたる手の内、二十四時が其うち

は

權兵 天水五臓へ納まれば、息吹き返す稀代の象身。

助八 權三にとゞめの残つたも、助けた非人の宵寝の仁助、足を洗つて煙草屋權兵衛、槍の穂先きは元

の鞘、納めてやらうが、金でも仕切りやれ。これぢやア金と、ころばずばなるまい。

ト思ひ入れ。聖天の鳴り物になり、向うより助市、紺木綿、奴の形にて、藁の鳥毛槍を腰に差し、一

本差しにて出て来り、花道にて門口を見て

助市 百足煙草の唐犬權兵衛、慥かにあれに小紫。さうぢや。

ト門口へ来り、内を窺ひ、イむ。

助八 割り符の合つた女が話し。槍の始末はどう附けるな。

權兵 足を洗つた御祝儀を、非人の前から仕切りを取るか。併し今ではちんこ切り、庖丁ならば買ふ氣

だが、槍は不用だ、その上に、金といつちやア苦しがり

助八 工面が出来ぬか。出来さばい、ワ。これから爰に埋めてある。あの小紫の事が大切。殊にこの

槍を餌にして、お砂利の上で

ト槍を引ツ提げ出かゝるを、權兵衛とめて

權兵 コレサ、さう氣短かに

助八 知らねえワ。

ト門口へ出る。助市、件の槍をもぎ取る。助八恠りして

何をしやアがる。

ト顔を見て

ヤ、こなたは兄貴か。

助市 おのれが目にも助市と

ト内へ突き込む。権兵衛見て

権兵衛 ヤ、こなたは助市、何用あつて。

助市 少々お頼み。殊に見附けし弟め。

助八 ヤ。

ト出でんとするを引ッ捕へ

助市 エ、おのれはなア。

ト合ひ方になり

身共が留守を考へて、跡へ仕掛けて主人の召し物、定紋附きしお小袖を、よくも盗んでうせをつたな。其お小袖ゆる思はぬ間違ひ。権三様とも露知らず

ト思ひ入れあり

兄が云ひ分。おのれを手にかけて

ト刀へ手をかけるを、権兵衛留めて

権兵衛 ア、そんなら噂の貴様の弟、あの助八とは、この男か。心の悪いと常から噂。穢ない指でも

親身の兄弟、この丹助が命の御無心。

助市 思へば憎ッくい人非人、助け置かれぬ奴ながら、久しぶりで逢うたるこなた、詞にめで、助け置く。命冥加な

ト門口へ突き出し

百年も生きをらう。

ト思ひ入れ。

権兵衛 それで此方も安堵。

助八 安堵しねえはこの助八、兄でも杖でも大事ない。この槍ばかりは

ト寄るを押へて

助市 何であらうとこの槍は、丹助どのから出たなれば、いらぬおのれが……サ、受取つて置かッしや
りませ。

ト權兵衛へ渡す。

權兵 何かといかい世話になります。

ト助八思ひ入れあつて

助八 そんならいらざる左平次に、槍は矢ッ張り元々へ……どうするものだ。仕方がねえ。これから仕事は小紫、かの親方へ、爰にゐるのを

權兵 助八待ちやれ。槍の代りは、ソレ。

ト前幕に手に入れし似せ物の天國を渡す。

助八 こりやコレ慥かおれが手で

權兵 廻りくゝて手に入る天國。

助市 ナニ、天國はお家の寶。それを彼奴に

權兵 サ、渡して置くのも、この身の錆を

助八 臺なしにした此方の代物、これを預けてあの槍の、その代金を交易するか。

權兵 イ、ヤ、貴様の望みの通り、槍の價が出来たるその時

助八 また元々へ引きかへる。して、その金は

權兵 長くは待たせぬ、今宵のうちに。出合ふ所は柳原 稻荷河岸まで出かけて來やれ。その時引替へ。

助八 間違ひなしに出かけて來よう。その時必ず

權兵 この身の舊惡、口ふさぎ、高は云はねど小判の耳を

助八 揃へて寄越しやれ。それまで預ける此方の代物。この天國は

助市 あの惡黨めに渡すは氣遣ひ。

ト寄るを押へて

權兵 ハテ、おぶつた子より

助八 大事の代物。

ト腰に差し

後に逢はうよ。

ト眼になり、以前の鞘ゆゑ誠と心得、中身を見ずに一散に向うへ入る。此うち助市、こなしあつて助市 こなたの難儀と思ふゆゑ、その儘やりしがこれからは、兄が追ッかけ、あの天國を

ト追ひかけんとするを引留め

權兵 コレサ、助市、此方もうっかり誠の天國、なんで渡さう。コレ、あの劍こそ

ト云く。

助市 ヤ、すりや三浦屋にて變りし似せ物。

權兵 サ、それだによつて、必ず捨て、

助市 それで少しは安堵の思ひ。……安堵ならぬは死罪のお二人、重き手疵を受けたる取沙汰。それを癒やすの一藥あれど、親子男女の生血取り得、用ゆる藥法。よもや血汐が迂濁には

權兵 ナニサア、疵を受けたる笹野權三どのも、金瘡の惱みもありと世間の噂。それにて思ひあたりしは、あの小紫も何か惱みの

ト思ひ入れ、助市これを聞いて

助市 ヤ、その小紫と云はるゝは、慥かに三浦の小紫。主人の仇の權八どのに似たとの噂。殊にあの夜に家出して、こなたの内に駆け込みしを、聞いて來た小紫、敵の顔に似た事なら、なんと逢はせてくれまいか。

權兵 イヤ、そればかりは逢はされぬ。よし、その顔が似たにもせよ、男やもめの權兵衛が、連れて來たのも有やうは、氣があるゆるゑの色狂ひ。

助市 その色狂ひも大概に……コレ、こなたは實の娘もあらう。それも今では旦那の娘、八重梅様

ト云はうとして、

イヤ、主人の娘は助市が、鈴ヶ森までお供して、云ひ號けの權八どの、敵同士とはいふものゝ、仕置き場にて暇をひ。その時二人の産み年と、年月日時を守り袋を、權八どのと取替へ持つてござれども、その砌りよりお行くへを、見失うたるこの下郎。小紫こそ權八が、似寄りの噂と見ぬ戀に……女郎は賣り物、買はうと思つて。

權兵 三浦屋ならば賣るのが商賣。わしは煙草屋、女郎の賣り買ひ、仕憎いの。

助市 すりや、どのやうに頼んでも

權兵 わしが氣のあるあのおいらん、どうして餘人に

助市 逢はさぬならば物もらひ。一文奴の助市が、是非小紫に

ト鳥毛を引ツ提げ、奥へかゝるを、權兵衛立廻つて、助市を外へ突き出し、門口を締め

權兵 物貰ひなら出たのがない。手がふさがつた。其うちござれ。

助市 いや、敵に似たとの噂。もし白井ならお主の敵。

權兵 白井であらば古主の仇、どうして爰に置くものか。

助市 小紫にはどうあつても

権兵 違はせる事はマアならぬ。

助市 然らばあたりにいしかつて、いづれ善悪。

ト行きあたり、引返して思ひ入れ。これをキツカケに唄になり、こなしあつて路地の内へ入る。入り相の鐘、合ひ方。よき時分、権八の小紫、しごきの形にて、奥より出かゝつて窺ふ。

権兵 あの助市が小紫を、疑ふ心と思へども、よもや白井が女には

ト思はず振返つて、顔見合せて。

小紫 あるじの旦那さん。

権兵 おいらん。何かと氣詰まり。

小紫 なんのマア、わたしやあの夜の騒動を、怖さのまゝに、知らぬお前を頼んであの場を

権兵 連れては来たが一人者、あの三浦屋から迎ひの来るまで、心置きなう。わしも其うち中三を買つて、居續けにゐる心持ち。コレ、おいらん、あんな恐ろしい事のあつた内へ歸らずと、物は相談、わしが喉アになる氣はないか。

トしなだれる。

小紫 そりやモウ、切つ、張つ、の劍の中、助けてもらうた恩のあるお前ぢやもの、親方さんが得心な

らば。

権兵 そいつは有り難い。其お情けのお詞に、甘へてぬしへ。

ト抱き附く。この時小紫、肩先きの痛む思ひ入れにて

小紫 アイタ、、、、、。

権兵 どうしたく。

小紫 アイ、この肩先きに少つと痛みが

権兵 そいつは悪いの。何か薬が

ト小紫の守り、袖より出かゝりしを見て

ア、こりやア何だ。

小紫 アイ、大事のわたしが

権兵 ア、大事のとは、起證だの。

小紫 どうして其やうな

権兵 起證でなくば、見せなさいく。

ト寄るを、守り袋を隠して

小紫 なんの其やうな

四六二

権兵 ア、見せすばよしサ。おれも又、よく見たがるやつサ。……イヤ、見たがるといへば、もう暮れ方、あかりの支度。

ト角行燈を出し、油注ぎを見て

ア、油が切れたが、コレ、おいらん、油を買つてくるから、其うちお前。イヤ、留守へまた先刻の奴等がうせやうも知れず。

小紫 イエ、大事ありんせん。ちよつと買つて來なさんせ。

権兵 そんなら其うち、二階へなりと上がつてゐなさい……ほんに、二階に借り物の琴があるが、イヤ、弾いては悪いよ。わしが歸るまでは黙つてゐなよ。

ト云ひさま、件の槍を取つて後へ隠し、油注ぎを持つて門口へ出かゝる。ほの暗き思ひ入れ。

小紫 もう暗うなるほどに、早う歸りなんしよ。

権兵 ぢきに歸るわな。

ト門口へ出て、思ひ入れあつて

素性を知つたあの助八、生けて置いては

小紫 まだるなんすか。

ト出かゝる。

ト油注ぎを投げ捨て、槍の穂先を手拭にて拭ふ、

権兵 出ては悪いよ。……待つてゐな。

ト唄になり、槍を隠し、向うへ一散に入る。小紫 残り、思ひ入れあつて

小紫 心の知れぬ主のお方。あの三浦屋の間違ひも、誠の武士の義を捨てしと、我れを恨みて早まる權三。破却なしたる位牌が起り、科なき人を手にかけて、不便や妹のお才まで、思へばこの身の身替り同前。何につけても金瘡に、用ふる薬は閑心が、方にはあれど

ト肩先き押へて思ひ入れ。この時捨て鐘きびしく、下の障子の間より竹槍を小紫へ突きかける。驚いてこれを捕へ、手荒く引く。障子蹴はなし、助市、槍に引かれ、ツカ、と出て小紫と立廻り、キツとなる。

思ひがけなき、女子のわたしを

助市 その偽りをとりおいて、誠の武士と云はれんなら、實名明し、主人の敵、勝負さつしやい、權八どの。

四六三

小紫 イエ、わたしや小紫。なんで其やうな

助市 卑怯な一言。鈴ヶ森にて八重梅様、伴ふ砌り覺えがござらう。縛め切つておいたるも、主人の敵をやみくくと、仕置きになすが残念ゆる、一旦助けし下郎が寸志。八重梅様はさは知らで、黒髪切つてお行くへ知れず。身共が主の仇敵を、討たねば外に誰れあつて

小紫 無禮な一言。よし又わたしが白井にせよ。賣出でざる其うちには、互ひに討たじ、討つまいと、契約なせしその上に、惱める金瘡、平癒なさぬ其うちは

助市 今更未練な權八どの、是非々々下郎が主人の敵

ト竹槍にて向ふ。小紫 肩先き痛む思ひ入れにて、これをあしらひ、竹槍を打ち落す。助市 すかさず一腰抜いて切り附ける。小紫 肩先き痛み、ひるむを引附け、白刃を差附けキツとなる。この時暮れ六つの鐘鳴る。助市 思ひ入れあつて

ヤ、ありや暮れ六つの……さすれば鳥眼の

ト思ひ入れ。

小紫 たつてとあれば

ト竹槍取つて突いてかゝる。助市 鳥眼の立廻りにて、竹の先を捕へる。小紫 手荒く突く。これにて

助市 控となり

助市 こりや權八どの、助市が、鳥眼と聞いて、騙し討ちにか、こなたはなう。

小紫 忠義の働き、助け置きたきものなれど、聞きわけなければ、是非に及ばぬ返り討ち。

ト思はず男の思ひ入れ。

助市 主人の娘に連れ添ふこなた。いは、家來も同然ながら、刃向ひ立ても武士の意地。

ト刎れ返し、立ち上がるを、小紫 立廻つて、舞臺よき所へ來り、助市 控となる。小紫 落ちたる白刃を取つて振り上げる。助市 兩肌脱ぐ。白襦袢に、こまくと云ひ譯書きし、書置きの襦袢を着込みある體。小紫、おぼろに見附け

小紫 肌の襦袢に何やら文字が

助市 下郎が云ひ分、討たる、覺悟。

小紫 ヤ。

助市 モシ。

ト首さしのべて、手を合せ、サツとなる。小紫 振り上げし刀を落し、襦袢の書置きに目を附ける。思ひ入れ。これをキツカケに前側へ葎、バラくと下りる。時の鐘、向う、バタ／＼にて、糊紅、

手負ひの助八、似せ物の天國を抜き持ち、權兵衛は槍の穂先きにて、助八を突きたる體。立廻りながら花道にて

助八 うぬ、天國の似せ物渡し、その上おれに何の意趣。……人殺しだく。

トわめくた、槍にて無暗に突く。助八、切りかけるを、權兵衛抜き身を引ツたくり、立廻りながら舞臺へ来て、助八を取つて押へ、槍にてとめをさす。思ひ入れあつて、釣瓶繩を下げ、水を汲み、手足の血を洗ふこなし。此うち舞臺にて葭簀しづかに上がると小紫の權八、七輪へ附け木を大分さしくべ、この燃ゆる火にて、片袖の書置きを讀みある見ず。よき所に助市の死骸あり。鳴り物、捨て鐘、誂への合ひ方、思ひ入れあつて

權八 さては忠義の助市が、權三を弟の助八と、思ひ違ひに疵を附け、殊に八重梅見失ひ、云ひ譯のため覺悟して、我れに討たれん身の覺悟。ハテ、いたはしき

ト思ひ入れ。この時權兵衛、血を洗ひ、助八の死骸と、似せ物の天國を井戸へ打ち込む。水音する。これを聞き權八、助市の死骸を手早く障子の向うへ隠す。この時件の守りを落すこと。權八思ひ入れあつて、抜き足にて門口を明ける。權兵衛驚き「ワツ」と飛び退く。權八恟りして、件の助市の一腰を隠し、窺ひ見て

權八 誰れさんぢや。

權兵 おれだ。

ト内へ入る。

權八 歸りなさんしたかえ。わたしや三浦屋から、先刻の衆が見えたと思つて

ト一腰を後ろへ隠す

權兵 さぞお前、待つたであらうの……ア、まだ灯りをつけずにか。

權八 お前、油を取りに行きなさんしたぞえ。

權兵 ほんにさうだ。買ひに行つて油を忘れて來た。ア、暗くつては

ト思ひ入れ。

よし、提灯に蠟燭のともし缺けが

トあたりを尋ね、ぶら提灯をさぐり、中より蠟燭を出

あつたぞく。蠟燭を立てよう。

ト火鉢の火にて、附け木へ移し、蠟燭をともし、有りあふ行燈へ蠟燭を立て

イカサマ、おいらんと二人ゐるに、油ぢやア、うつりがわるい。どうでも蠟燭のあかりぢやア、

一しほ美しいワ。

ト落ちてある守り袋を見附け

こりやコン、先刻見ようと云つた、ぬしの起請か。

権八ほんに粗忽に、わたしが落して

ト取らうとするを、権兵衛扣へて

権兵 オット、待ちなさい。とてもの事に、色のその名を

権八 ア、コレ。

ト寄るを押へて、権兵衛手早く書き物を取出して見て

権兵 こりやア男の起請でなく、生れし年月記せしばかり、殊にその名も八重梅と

権八 アイ、その八重梅は、わたしが幼名。

権兵 ヤ、すりや、おいらんの幼名は、アノ八重梅と……そんならもしや、顔見ぬ娘か。

ト思ひ入れ。

権八 エ。

権兵 サ、娘にしてもよい年配、それを女房に持ちたい願ひ。萬更ぬしも

権八 戀の諸譯も、苦界の義理も

権兵 知つてあらう。

権八 それも勤めの身につまされて

権兵 噂アになる氣か。

権八 エ。

権兵 足を附けたよ。

権八 オヤ、馬鹿らしいによ。

ト向うバタ／＼になり、八重梅 若衆がつらにて、袖下切りたる件の藍鼠の小袖、お仕着と見える思ひ入れ。好みの帯しどけなく解けかゝりし體にて、一散に走り來り、内へ駆け入り、門の戸をシヤンと締めて、ホツと思ひ入れ。兩人惘りして

権兵 誰れだく。人の内へ案内なしに。見りやアどうやら若衆のやうな

ト窺ひ見る。八重梅思ひ入れあつて

八重 アイ、わたしや危ふい所を遁れて

ト権八聞き耳立て

権八 どうやら女子の聲のやうだが
八重 イ、エ、わたしや……私しは若年者、仔細ござつて跡より追手。お隠しなされて下さりませ。

ト男の思ひ入れ。

権八 すりやアノ、追手に

ト思はず顔見合せ

八重 ヤ、お前は。

権八 其方は。

権兵 近附きか。

権八 アイ……イ、エ。

ト思ひ入れ。

権兵 そんなら、おいらん、この前髪を

八重 今更お前、知らぬとは

ト女の思ひ入れあり、又氣を變へて

イヤ、知らぬとは云はれまい。

ト思ひ入れあつて、守り袋を出し

守りの中の書き物は、この身の素性。生れし年月日時まで、記しあるのが慥かな證據。逢ふと其ま、知らぬとは、そりや恨めしい白井さん……サ、白井といふは身が家名。

権八 さては其方が……イヤアノ、お前が

八重 證據の守り。

ト出す。権兵衛取り、よく見て

権兵 ヤ、この書き物は白井権八。そんならお前が

八重 囚人駕籠を破つて爰へ。思ふお方に逢ひたいばかり。……イヤ、お尋ねの白井権八。

権兵 すりやアノ、天下の囚人なる、権八といふ證據の守り。小紫には幼名を、八重梅といふこの書き物。若衆は白井、白梅が、ゆかりの色の紫に、心引かされ八重咲きの、花を散らしに來たので

あらう。但し守りを取替へて、持たば白井は別れし娘。

八重 さう云はしやんすお前の年配、お顔知らねど、若しや誠の

ト権兵衛の顔をサツと見る。権八「さては」と思ひ入れ。八重梅また氣を變へて

その八重梅にこの世にて、一目逢ひたき我が願ひ。イヤ、権八が身の願ひ。我れと名乗つて捕は

れの、證據はそれなる守りの書き物。網をり物にて引かる、途中、駕籠を破つて助けしは、わたしが姉たる三勝さん、それに縁ある半七どの、この家へ行かば戀しき男に、逢うてこの品渡しなば、女子の操が

ト天國を懐中より出しかけ、又氣を變へ

イヤ、その八重梅に逢はると、聞いてこれまで足も空。妹春の縁の我が夫……イヤ我が妻の八重梅どの、よう顔見せて下されたなう。

權兵 イヤ、幼名は八重梅でも、今日はおいらん小紫、引込み置くもおれが女房に。その相談の最中へ、命のがれて駆け込め權八。この家を出しては物が無い。今から爰に丁稚奉公、人目忍んでちんこ切り、勤めて見なさい。

權八 すりや、駆け込みし權八さんを、爰のお内に隠まうて

八重 奉公せよとお慈悲なお詞、成程あなたのお内にしはし。

權兵 併し譯あるその二人、一つに置くも修羅の種。小紫、お前はあの二階へ。

權八 そんならわたしは

權兵 サ、上がつてくんな。

ト權八の手を取つて二階へ上げる。この時權八、助市の一腰を隠し、二階の琴を見て

權八 お内に似合はぬこの琴は

權兵 ぬしの慰み、わざく借りて

八重 して、私しは、いよく爰に

權兵 奉公させるその手見せ。コレく、

ト切り藁と、風除けの小さき屏風、庖丁添へて持つてゆき

刻み煙草の、お前は見習ひ。

八重 左様ござらば

ト件の道具引寄せ、煙草切りにかゝる。

權兵 其うちわしは引下けの、三里へ灸を

ト二枚折りの屏風を立て、盆に艾と線香を用意して、よき所へ座を取り

イヤ、おれが三里の灸より、噂のある權八様、金瘡にての腕の惱み。

八重 なんのわたしは……イヤ、私しは其やうな

ト様子知らぬ思ひ入れ。權八は二階にてこなしあつて

權八 ア、モシ、權八さんは手疵の惱み。その金瘡の良薬も

ト我が腕へ思ひ入れにて知らず。八重梅こなしあつて

八重 成る程、白井は金瘡の、手疵の惱み。

ト權八と顔見合せて思ひ入れ。

權兵 痛みを直す良薬に、無くて叶はぬ親子の生血、二人が二人覺悟して、切つたる血なら金瘡の

八重 御用に立たば夫の爲……イヤ、この權八が金瘡の

ト爰にて權八、肩先きの疵を教へるこなし。八重梅は血汐を薬に用ひんと心附きたる思ひ入れ。

權兵 小紫とて肩先きに、床でのもつれ、齒形の疵か。二人が二人、疵持つ足の……サ、三里の灸は、

手つからおれが

權八 イ、エ、わたしがお前の灸を

ト下りんとするを留めて

權兵 ハテ、痛み所のあるおいらん。わしが願ひだ、二階で琴を……それ聴きながら皮切りの

八重 切つても切れぬ親と子の、思はず爰で、慥かに父さん

權兵 娘……とサ、云ふを云はぬは

權八 浮世の義理に搦まれし

權兵 血筋の繩目、駕籠の綱。

八重 通れてこゝへとまり木の

權兵 足さへ弱き羽抜け鳥。

權八 安き心も絲竹の

權兵 調べる琴の一曲を

ト獨吟、琴のかゝり。權兵衛、三里を押へて思ひ入れ。二階の權八、琴にかゝる、八重梅煙草切り臺

へ風除けを置き、權兵衛は二板折りを前へ立て、三里を据ゑる。この唄のうち向うより權三、虚無

僧の形、尺八を吹き出て来る。跡より捕り手二人、大小にて十手をかまへ、窺ひく附いて來り、權

三は門口に立ち、竹を合はす。捕手二人囁き合ひ、路地へ入る。行燈の蠟燭、だんくと心の立ちし

思ひ入れにて、ほの暗くなる。この時唄一くさり切れる。

權八 あの蠟燭の心が立ちしか、あかりも暗う

權兵 暗きその身の日蔭者、親は泣き寄り、蠟燭の、流れの末が……アツ、、、、

ト思ひ入れ。

捕手 まさしく笹野。

ト権三へかゝる。兩方一時の立廻りあつて、天蓋落ちて権三のこしらへ、二人の捕り手を尺八にて當てる。二人見事に倒れる。二階の〇△立廻りのうち、権八の女小袖脱げて、下は紋附き、権八の形にて、髪は若衆と見える仕掛けにて、助市の一腰を構へ、二人を取つて下家へ投げる。〇△見事にかへる。此はずみに八重梅と権兵衛の前にたてたる屏風倒れる。八重梅は上着の肌脱ぎ、下には振り袖を着込み、煙草庵丁にて乳の下を掻切りある體。権兵衛は槍にて腹切りの體。空に月魄上がる。四人とも一時に顔見合せ、キツと思ひ入れ。この時遠寄せの頭を打込み、直ぐにほぐれて通り神樂、誂への合ひ方。所々にて早拍子木を打ち立てる。

権三 すりや権八には、あの夜に紛れて

権八 この家へ頼つて窺ふ今宵、権八なりと駆け込む八重梅。

八重 夫に代る心には、網のかかりし囚人駕籠。さは知らずして半七どの、駕籠を破つてこの家を教へ、
急ぎ天國、権八様へ、お渡しなされと貰うた劍。血汐の穢れを憚つて、即ち爰に

ト天國を差出す。権三取つて

権三 すりや實義ある長九郎、あの半七へ遣はせし、その天國を八重梅に、渡せし心は、三勝殺せしその云ひ分、妹の彼れに送りしならん。寶も出づるその上に、自殺いたせば金瘡の

権兵 お役に立てんと今日の今、めぐり逢ひたる實の親。以前小者の丹助が、取逃がしたる百足丸。その槍先きで、主人のあなたを

権三 さてこそ皮肉の間を除け、心あつての槍先きに、殊更象身のこの権三。

権兵 役目といへど御主人を、突き貫きし非人は御家來、天罰直ちにこの槍で、腹掻切つて申し譯。殊に半七三勝様、敵同士なる主従と、知つたる上に頼み手の、あるを幸ひ母親と、偽り事の縁切りが、跡にて聞けば皆仇事。

八重 姉さんまでが非業の最期。

権八 して又権三が下部にて、この権八を隠まふ心は。

権兵 それぞ主人の仇敵、外へ逃がさぬ下郎が手立て。殊に最前、以前の女房、話して知つたる娘は八重梅、親子男女の二人が血汐。

権三 この一薬に交へて白井へ。

権八 心づくしの親子の生血。

ト二階よりツカ／＼と下りる。此うち権兵衛、八重梅を引寄せ、流るゝ血汐を鉢に漉へて
権兵 サ、薬に混じて

ト藥もろとも出す。權八取つて

權八 敵の我れをさほどまで

權三 これ皆武士の恩義の二つ。

ト此うち權八、鉢の中なる血汐を服む思ひ入れ。

良薬用ふる上からは、快氣は目前。殊に天國出る上は、今一品は陰陽の

權兵 御判は即ち鈴ヶ森、あの暗まぎれ、怪しき品、口に咬へて思はずも、この腹中に納まりしが、今

切る腹の臍に、ありく。

ト臍に搦みし御判を差出す。權三、手桶の水にてその血を濯ぎ

權三 ヤ、これぞ誠に陰陽の

權八 二品揃ふ上からは

權三 殿へ差上げ、お家の納まり。

權八 只不便なは助市が、身の云ひ譯を片袖に、残してわれと返り討ち。

ト片袖を見せる

權三 養父の敵は本庄白井。これより直ぐに鎌倉へ、めでたう出立。

權兵 親と娘はあの世へ旅立ち。

八重 菩提の爲の比翼塚。

權三 あと懇ろに

ト思ひ入れ。○△立ち上がつて

○△ さてこそ二人が

トかゝるを、權三權八ちよつと立廻つて、帯は解け、白の絆纏 兩人の手へ一つ宛のこる。思ひ入れ

權八 これ幸ひの敵討ち。

權三 討ち、討たるゝも

權八 天運次第。

兩人 然らば此まゝ。

八重 随分御無事で

權兵 モシ。

ト槍を差出す。權八取つて思ひ入れ。

○△うぬを

トかゝるを、權三は天國にて○を切る。權八は槍の穂先きにて△を突く。兩人一度に苦しむ。この時俄かに空に雷鳴、雨車。槍の穂先きへ件の百足現はれる。權三は虚空を見上げ、權八は百足を見詰めて

權八 これぞ世にいふ百足丸。

權三 俄かの雷鳴、劍の奇特。

權八 忽ち癒ゆる我が金瘡。

權三 これも二人が忠心、貞心。

權八 思へば不便な

ト兩人は權兵衛と八重梅の苦しみを見て思ひ入れ。これにて切りかけし手先ゆるむゆゑ、○△立ちながら落入る。權三權八氣を變へて、双方を見事に投げる。此うち權兵衛と八重梅は落入る。權三權八は不便の思ひ入れにて見合す。この途端に木の頭。兩人泣き落す。よろしくキザミ。ひやうし

幕

第二番目 大切

大山道敵討の場

役名

笹野權三。白井權八。本庄助太夫。白井兵左衛門。野ざらし半七。幡隨長兵衛。伊豆ノ次郎祐兼實ハ赤澤十内。

本舞臺、三間の間、向う黒幕。正面欄矢來。左右の袖草土手、裾ば石垣、書割りの張り物。舞臺前浪板。すべて高輪大木戸の體。浪の音、禪のツトメにて幕明く。

ト爰に役人藤馬、四天の捕り手四人、菖蒲草の足輕二人、突棒、刺又、袖搦みを持ち、立ちかゝるを長兵衛、着流し一本差し、羽織を肩に掛け、留めてゐる。舞臺所々に高張り提灯など打毀せし體にて散亂してあり、真中に半七、青綱の破れたる囚人惣籠に腰かけてゐる見得。藤馬皆々十手をかまへ

藤馬 ヤイノ、大切の囚人權八の、網乗り物を打破り、落しやつたる不敵な奴、殊更その身もお上より、お尋ね厳しき野晒し半七、重罪人の身を以て、かゝる大膽いたせし曲者、かばひ立てする不敵の町人。して其方は

皆々 何者だ。

ト立ちかゝる。

長兵 ア、モシ、どう致しまして、お上よりお尋ね願ひし科人を、何しにかばひませう。御用先きの妨げを致しまして、よいものでござりまするか。生得無暗向う見ずな私しでも、恐れるところは、却つて外の人より恐れまするが、権八どの、網乗り物を、破つて逃がしたといふ男を見ますれば、萬更知らぬ者でもござりませぬ。私しめは花川戸の、幡隨長兵衛といふ者でござりまするが、ちつとあの者に云ひたい事も、聞きたい事もござりまするゆゑ、恐れながら、しばしの御猶豫がなりました事なれば、お役人様、へい、願ひ申しまする。

トこなし。

藤馬 すりや、其方が幡隨長兵衛とな。イカサマ、聞き及んだる男達、其方が願ひとあれば、しばしは猶豫いたしてくれうワ。

長兵 へい、それは有り難うござりまする。これはあなた方、暫く御容赦を願ひ申しまする。

ト皆々へ挨拶して、半七の側へ來り、こなしあつて

野晒し半七、久し振りで、變つた所で逢つたなア。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、半七こなしあつて

半七 花川戸の頭、長兵衛どん、こなたの方から義絶して、平常は物も云はない、この野晒しへ。

長兵 聞きやれ。内の野郎どもを連れて、二三日あとに恵方詣りから氣が紛れ、品川の増本で、居續け

うつての歸りがけ、通りか、つて様子を見りやア、この場の始末。コレ半七、おぬしは歴とした茜足袋の息子株で、何もこの長兵衛が子分といふではないが、馴染んだ女の貰ひ引き、はした喧嘩の仲人から近附きになつて、ごろつき仲間の兄弟分。おぬしが行跡、少つとこの長兵衛が氣にいらぬゆゑ、義絶して今日が日まで、どこで逢つても知らぬ同士、面を反けてゐた仲も、通りかかつて様子を聞けば、その身もお上のお尋ね者、お手にあは、忽ちに、木を切るを知りながら、飛んで火に入る夏の蟲。警護きびしい権八どの、網乗り物もこの通り、落しやつたるその働。天晴れ出かしたその性根玉を、今日が日まで見そこなつたは、幡隨院が一生のあやまり、不請して下さいよ。

半七 娑婆の名残りに長兵衛どの、その詞を聞く上は、こなたの異名の幡隨院、名僧知識の引導より、

この半七は浮かみませぬ……サア、お役人様、キリ、繩打ち、引かつしやりませ。

藤馬 イヤ、おのれは不敵な奴だわえ。成る程、権八が詮議は追つて。コリヤ、者ども、半七に繩を打て。

捕手 ハ、ア。

ト捕り手は半七を縛り上げる。長兵衛思ひ入れあつて

長兵 出かした半七。おぬしが代官所へ引かれるうち、期を延ばさば、權三どのと權八どの

半七 天國手に入るその上は、互ひに大事の御身ゆゑ、權三どの、人殺し、網を破りし重罪も、十把一
たばにからけ、あの三勝へ未來の土産。

長兵 遅れ先立つ世の習ひ。遅かれ早かれ、おれも跡から

半七 イ、ヤ、決して急ぎはいらぬ。随分ゆつくり

長兵 そんなら半七

半七 長兵衛どの、

長兵 あの世で逢はうよ。

藤馬 科人、立たう。

半七 頭、回向を頼みやすぞえ。

ト時の太鼓、三重になり、藤馬先きに半七、捕り手皆々向うへ入る。長兵衛あを見送り、思ひ入れあ
つて

長兵 ハテ、奇特な奴だ……ほんに、思ひ出せば、いつぞや鎌倉で、通りかゝりといひながら、互ひに

養父の敵ごと、權八どのに權三どの、切り結んだる白刃と白刃、忠孝二つと仲人に立つて、紛失
なしたる寶の出るまで、この長兵衛が預つたが、その短刀が權八どの、手に入る上は、親の代か
らお出入り屋敷の白井本庄、再興なすは近いうち。それにしても、あの悪者の野晒しめは、見上
けた魂ひ。成る程なア、世の中の人と、煙草の善し悪しは、煙りとならねば

トこの時、本釣り鐘ゴンと鳴る。

ア、もう明け六つださうだ。

ト思ひ入れ。馬士唄にて、道具廻る。

本舞臺、正面藁葺きの小宮、金毘羅大権現と書きたる白布の戸帳を下げ、奉納の繪馬大分。左右に、
三立目に残せし刃引きの白刃、これを繪馬にかけ、願主白井氏、一つには願主本庄氏と記し、納めある
體。上下の杉の枝より油紙帳を吊り、修行者野宿の體。この下の方に武藏相模國境と記したる榜示
札、すべて戸塚塚木の體。時の鐘、馬士唄、驛路の鈴にて道具とまる。

ト爰に久内、旅形、大小にて、弓張りを持ち、運平、屋敷飛脚にて、狀箱を首に掛け、飛脚提灯を持
ち、宮の縁に腰を掛けてゐて

久内 コレ、運平どの、貴様は殊の外急用と見えるな。

運平 左様でござりまする。久内様、お聞きなされませ。大江のお屋敷では御家督の砌り、無くて叶はぬ陰陽の御判、まつた天國の劍、日延への日限明日限り。それゆる御惣領千島之助様は御切腹、御家督は弟御の志摩五郎様と、あの蒲様のお屋敷へ、お知らせの早飛脚でござる。

久内 それは御苦勞千萬。拙者も工藤家の御連枝、次郎左衛門祐兼様のお供にて、藤澤宿にお泊り、明朝のお立ちについて、殊の外取込みでござる……然らば、その後、ゆるく御意得ませう。

ト久内は下座へ入る。運平残り

運平 ハテ、あの久内どのの附合ひの無い男だ。併し、急の御状、どりや蒲様のお屋敷へ参らうか。ト時の鐘、身こしらへして、草鞋の紐を結びある。この時金毘羅の戸帳を明け、内より権三、白き帽子、金毘羅詣りの形にて、一腰を差し窺ひ出て、行かんとする運平を捕へ、状箱を引ツたくる。ヤ、うぬ、金毘羅詣りめ。大切なる主人の御状、サ、返しをれく。おのれらが見て役に立たぬ物、戻しをらぬか。

ト立寄るを、見事に投げ、状箱の蓋を明ける。運平またかゝるを、とつて投げつけ、足下に踏まへ、状を月あかりにかざし見て

権三 さては若殿切腹と、御身の大事を披露の書面。今ぞ火急の主家の大事。今宵思はず兩人とも、宿

りし社は金山彦、金毘羅應護の利益なるか。エ、忝ない。

運平 おのれ、その状。トかゝるを、金剛杖にくらばす。これにて下座へ逃げて入る。権三は宮の方に向ひ

権三 コレ同行、目が覚めてか。お家の大事がト高聲に呼ばばる。宮の内より権八、同じく行者の形、白の帽子、二本差しにて出て來り

権八 一大事とは氣遣はしい。仔細は何と。権三 蒲どのの屋敷へ急ぎの飛脚。書面のおもてはト状を渡す、権八見て

権八 まことや、お家の一大事。屋敷へ送らば主人の御身、爰で直ぐさまト状を寸々に引裂き

二品揃ふこの様子を、直ぐさま屋敷へ。ト行かうとする。権三引とめ

権三 イヤ、その寶の出でたるは、おてまへばかりの働きならず。身共が二品持参する。扣へておるやれ。

權八でもこれまでの憂き難難、命を的の寶の詮議。それゆる養父の敵さへ、眼前見遁がすこの權八。
權三 そりや此方も同じ事。敵同士は相互ひ、殿の御難儀救うた上、權三が養父の仇たる權八。
權八 是非この品は拙者が持參。

ト天國の白鞘、袱紗包みの御判、二品持つて行かうとする。

權三 權三に渡さにや、養父の敵を

ト抜かうとする。權八押へて

權八 然らば敵は此方も

ト腰刀へ手をかける。兩人ちよつと立廻り。この時上の方紙帳の中より、助太夫、下の紙帳より兵左衛門、兩人とも世話六部の形にて走り出て

助太 こりや待て權三。

兵左 急くな兩人。

ト留めるを振切り、突きのけく立ちかゝるを、助太夫兵左衛門心附き、宮の左右に懸けたる白刃の額二枚を、てんでに取つて二人が中へ分け入り、件の額を寄せて、キツと留めて

助太 必ず急くな、早まるな。
兵左

トこれにて兩人心附き

權三 ヤ、あなたは養父助太夫様。

權八 誠に親人、存命にてありけるか。

兩人 仔細ごあらん。サ、なんと。

ト變りし合ひ方。

助太 その仔細こそ誠に珍事。この助太夫が存命も、いつぞや六浦の磯際にて、權八の爲に思はぬ手疵。

淺瀬ながらも海に入り、水死と思ふ其うちに、下ろしある四つ手網、それに縋つてやうくと、

引上りくればは幡隨長兵衛。

兵左 兵左衛門も、數ヶ所といへど皆かすり手。陸に上がつて長兵衛に、面談なせば早兩人は、水中を

潜つて立退く其あとに、捨て置く白刃をよく見れば、二腰ともに刃引きの様子。さてこそ北

條時政公、二人の刀を預かりて、お渡しありしは慥かに刃引き。詳しく様子は往來に

助太 認め置けば、これにて疑ひ、晴らせよ兩人

ト助太夫兵左衛門、めいゝ懐中より出して兩人に渡す。

權三 すりや、往來に、詳しく様子を

ト開き見ても。

權三 ナニノ、「二人の若者、天晴れの侍ひなりと惜しませ給ひ、兩方害めぬ情けのほど、さは知らずして兩人とも、兩家の親を討つたりと、存じ違ひの敵同士、殊に我れノ兩人は、肌身離さぬ象頭山のお守り」

權八 「殊に身共は水天宮のお守りまで、所持せしゆるに安々と、二人が二人守りの奇特。されども二親存命と、披露いたさばお家の佞人、實の納まり氣遣はしく、暫し姿を隠せよと、時政公の仰せを受け、養父二人は廻國修行」……ヤ、詳しく記せし

助太 その節残りし刃引きの刀は、まッこの如く繪馬に懸け、金毘羅宮へ。

權三 さすれば身共が討つたりし、兵左衛門どのも存命にて

權八 この權八が切り込みし、助太夫どのも堅固の上は

權三 討ち、討たる、の疑念も晴れ

權八 互ひの親々御安泰。

兩人 これにて二人の仇討ちも

助太 イ、ヤ、討つべき敵があるぞ。その跡早う。

ト兩人往來を開き

權三 「おこら二人は河津の胤、殊に双子の兄弟にて、都にありしその砌り、風折といふ女に馴染みその胎内に生れし二人、薬の上より身共が養育、即ち幼名、京の次郎と云ひしは權三。」

權八 「權八ことは三郎とて、白井へ養子、腹は變れど曾我殿原とは正しき兄弟。然るに家來赤澤十内といふ者、三ヶの莊の系圖を奪ひ、主の風折殺害なし、お尋ね者となりしゆる、變名なして寺西閑心、町醫の世渡り。」

權三 「奪ひし系圖を餌となし、蒲どのに取入つて、今のその名は次郎左衛門祐兼とて、伊豆一ヶ國を領地なし、富士の根方へ検見の役目。母の敵はその十内」

兵左 彼奴を討たずば孝道立つまい。兩人ともに

兩人 心得たるか。

權三 さては我れノ兩人は、河津の胤にて双子の兄弟

助太 京の次郎と云ひしは其方。

兵左 幼名、京の三郎こと、養子となして白井權八。

權八 すりや兩人は曾我どのに、矢張りゆかりの双子の落胤。さうとは知らいで、權三どの

權三 權八どもの誠の兄弟、夢にも知らざる二人の素性。不思議な縁で
兩人 あつたなア。

權三 只憎くきは家來十内。系圖を奪ひその上に、母を討つたる人非人。

權八 いつぞや逢うたる寺西閑心。

權三 面體覚えあるからは、母の敵を

兩人 討たいでおかうか。

ト思ひ入れ。

助太 して、我れくが失ふ品は

兵左 誠に二品。エ、忝ない。

ト天國と御判を、助大夫兵左衛門へ渡す。

權三 然らばこれより敵討ち。幸ひなるかな象頭山、行者姿の白出立ち。

權八 金毘羅應護の御利益にて、形も其まゝ敵討ち。

助太 藤澤宿を七つの出立。

兵左

權三 先きへ廻つて四ッ谷の別れ路。

權八 大山道の追分けにて

助太 いそふれ兩人

兵左 おのれ十内

ト行かんとする。運平は馬士一人を従へ、窺ひゐて

二人 今の御状を

トかゝるを、權三權八、二人を引敷き、キツと見得。時の鐘にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、うしろ黒幕。上の方に石の不動尊。石塔に大山道四ッ谷宿と朱にて書き、所々に杉の大樹。
七つの鐘かすめて、禪のツトメにて道具とまる。

ト馬士唄になり、向うより旅形の供廻り、三階残らす惣出にて箱提灯、弓張り、旅荷物大分、其うち
に旅乗り物身いで出る。駕籠脇に久内附添ひ、この人数舞臺へ來り

久内 お乗り物、暫く。

皆々 ハア。

ト乗り物をよき所へ下ろす。久内、駕籠に向ひ

久内 只今打ちしは、藤澤寺の七つの鐘。して御前には件の系圖、矢張り御所持でござりませうな。

ト思ひ入れあつて

へい、承知仕りました。然らば馬入川をば夜明けぬうちに

ト同勢に向ひ

いづれも聞かると、通りの仰せ。急いでお供いたされてよからう。

皆々 ハア、……お立ちく。

ト駕籠を昇き上げる。この時、權三權八飛んで出て

權三 母の敵の赤澤十内、變名なして豆州祐兼。

權八 河津が落胤、双子の兄弟、系圖を渡して速かに

權三 勝負いたせよ。

兩人 下部十内。……いで、乗り物の

ト駈けよつてかゝる。内より戸を刎れのけ、祐兼、野袴、羽織、大小の形にて、ツカ／＼と出て、兩人を突きつけ、キツとなる。

さてこそ面體覚えある

祐兼 權三、權八、二人の奴等。さてはおのれら、風折が、産み落したる双子の兄弟。

權八 云ふにや及ぶ。母の敵の赤澤十内

權三 奪ひし系圖を渡すまじきや。

祐兼 小癩なおのれら。いかにも系圖は三ヶの莊、所持せし女の所望なせしに、渡さぬ風折、ぶツ放し

たは赤澤十内、今は國取り、次郎祐兼、敵などは慮外な一言。間近く寄つたら、返り討ちだぞ

權三 さてこそ敵、尋常に

ト詰め寄る。

祐兼 切り捨てろ。

ト禪のツトメになり、大勢抜いてかゝるを、兩人追ひ散らす。この間に祐兼、同勢に紛れ退く。權八は追うて入る。爰にて夜明けの鐘、鶏の聲、知らせの柝にて黒幕切つて落す。遠目に見たる富士の景色、權三は久内と立廻つて切り下げる。それより大勢かゝるを、残らず切りまくる。下座より祐兼權八、切り合つて出てくる。立廻りのうち、一卷を落す。權八取つて

權八 慥かに系圖の

祐兼 それを

ト寄るを、權三ごんざう一太刀浴びせる。祐兼すけかねひるむを、兩人ふたり切り附けく、キツとなつて

權三 母の敵かたみ、覺おぼえたか。

トみる。助太夫すけだいふ、兵左衛門ひやうざゑもん出かゝりゐて

助太 兵左 めでたいく。

供廻 動うごくな。

ト取巻く。

權三 まづ今日こんにちはこれぎり。

トめでたく

打出し

とうからだうようやくわいだん
東海道四谷怪談

東海道四谷怪談

序幕

浅草觀世音額堂の場
宅悦住居の場
裏田圃の場

役名——小間物屋、與七實、佐藤與茂七。奥田庄三郎。伊藤喜兵衛。同娘、お梅。同乳母、お
横。たいこ醫者、尾扇。藥賣り、直助。藥賣り、藤八。お岩妹、お袖。四谷左門。茶屋内儀、お
政。通人、文嘉。柏屋彦兵衛。大三つの升太。按摩、宅悦。宅悦女房、お色。伊右衛門妻、お岩。
民谷伊右衛門。

本舞臺、三間の間、正面額堂、座元紋附きの團子提灯、掛け茶見世の道具よろしく、上の方楊枝
見世、爰にお袖、やつし娘、浴衣にて、楊枝をこしらへてゐる。側に庄三郎、菰かぶりにて寝てゐる。
額堂の内には、文嘉、通人の形。勝藏、店者のこしらへ。此方の床几に桃助、石藏、地廻りの形にて
茶を飲んでゐる。お政、茶屋女房にて茶を汲んでゐる。双盤、大拍子にて幕明く。

彦兵 かみさん、ま一つおくれんか。

まさ ハイ／＼、大分おかはきなさいますな。

彦兵 えらう走つて来たさかい、かわきくさるわいの。

文嘉 かみさん、わつちやアゆるりとしやせう。

まさ ハイ／＼。

ト 汲んできて

桃さん、もつと上げませうか。

桃助 踵でふんづけてくんな。

石藏 コレ、大概に飲みや。面が湯氣にあがるワ。カウ、氣をよくしてゐると、お飯を入れてくれと云ふぜ。いゝ加減にしやな。接待ぢやアねえわえ。

桃助 べら坊め、接待といふがあるものか。茶代は節句に水引で、結はへて持つて来て置くのだ。

石藏 おつウ云やアがる。觀音様の長辛ぢやアあるめえし。

桃助 カウ、お政さん、あの子はいつから出た。石や、見や、剛氣なもんだぜ。

石藏 剛氣に婀娜だな。おらア初めて見たぜ。

まさ その筈サ。あの子は昨日から代りに頼まれて出たが、楊枝見世にやア惜しいもんだなう。

桃助 ちけえねえ、衆三に其まゝだぜ。イヨ、大和屋々々々。

石藏 よせエ、可哀さうに、まぜツ返すなエ。

トこれにて文嘉、彦兵衛も見て

文嘉 成る程、鮮かだの。カウ、ありやア何か、月三兩の三月縛りとでもいはざア、話しは解るまいかの。

まさ なにサ、その癖さうでねえさうでござりますよ。

彦兵 ほんにきやうといものぢやな。なんと、花三本ぐらゐで話しは出来まいか。

まさ 左様サ、出来ない事もござりますまいよ。

桃助 そんなら地獄をするか。

まさ どうして、そんな事はしめえわな。

石藏 風が悪いと思つて、おらツちには、隠すの／＼。

まさ ナニ隠すものかね。本當に堅いとよ。

桃助 しらく／＼しくお前のやうに嘘をつく者はねえぜ。

石藏 年中大筒の額の下で、商賣をしてゐるから、鐵砲は當り前だらう。
桃助 鐵砲と云やア聞きねえ。奥州の獵人が、素的な木菟を生捕つて来て、奥山で見せるさうだ。
石藏 さうか。この繪圖か。
桃助 それよ。

ト柱に掛けてある繪圖面を取つて見せる。

彦兵 これかいな、えらい物ぢやな。

文嘉 なんだ、丈の高さが五尺五寸、胴の大きさが四尺二寸……こいつは大層な木菟だの。

ト皆々立寄り見る。双盤太鼓にて、向うより喜兵衛、袴、大小、老けたる拵へ。お梅、振り袖の娘。

お横、乳母の拵へ。尾扇、醫者にて、中間一人附き出て來り、花道にて

喜兵 コリヤお梅、今日は大分氣合ひもよささうなが、あまり又押して歩行いたすにも及ばぬことだ。

駕籠など申しつげうか。

うめ イエ、私しは矢ッ張りこれがよろしうござりますれど、あなたが嘸お氣まだるう思し召しま
せうと存じまして。

まさ サア、何事も其やうにお氣遣ひ遊ばすのが、それが矢ッ張りあなたの御持病。今日は御保養がて

らの御參詣、お氣儘におひろひ遊ばし、また御下向には、なんぞお氣に入りましたお人形でも、

大旦那様へおねだり遊ばしませ。

尾扇 左様々々、兎角にその御病症には、御醫散が肝要でござります。ちとあれなる茶屋にて、御休

息遊ばしまするがよろしうござりませう。

喜兵 イカサマ、左様いたさう、サ、來やれ。

ト皆々舞臺へ來り、床几へ腰をかける。

まさ ようお出でなされました。

まさ 御覽遊ばせ。此やうにも御參詣絶えず、群集いたします觀音様はござりませぬ。今日は私しも、と

もくくに、御願がけ致しまするほどに、あなたにも、彼のお方に早う……サア、早う御利益にて、

御本復遊ばすやうに、御信心遊ばしませ。

うめ 此方がこれ程思つてゐても、あなたの方にはよそ外に、又どのやうな……お神籤など、取つて見
やいなう。

ト思ひ入れ。

まさ 畏まりました。私しが呑みこんで居りまする。

尾扇 イヤ又、數多の醫書をも見たなれど、娘ツ子の病症を見定めるは、乳母にはしかずと、千金方に論じてござるて。全くこれは、戀煩ひと見えまするて。

トお梅、恥かしき思ひ入れ。

まき また尾扇さんの、其やうな事を。

桃助 石や、聞いたか。あのお嬢様は戀煩ひだよ。てめえを思つてゐるのぢやアねえか。

石藏 うさアねえ。戀の煩ひなら、瀧に打たせて見ればい。

彦兵 大切な錢金遣うてさへ、容易に出来んものが、女子の方から煩ふほど慕ふとは、どこの和郎か、

え、月日の下に生れくさつたなア。

文嘉 此方でよければ、お寢間の伽に行きてえね。

桃助 モシ、おつう云ひなざるね。

喜兵 たとへ戀ひ病であらうとも、氣にいつた男なら、金にあかしても聲に致し遣はす。ハテ、當時出

頭の師直様の御家來、伊藤喜兵衛が一人の孫……ナア尾扇老、乳母もともく、お梅が胸中承

つた上では、また如何やうとも取計らうて遣はさうほどに、左様心得めされい。

まき 畏まりました。この儀は又私しが、追つて申し上げまするでござりませう。

尾扇 それが宜しうござるて。何事を仰せ出されうが、これが一つ出来ぬと申す儀はござらぬて。少々

御不快とあれば、御保養の故とござつて、四ツ谷町邊に御別荘をもおしつらひ。何でもあなたの

御意次第でござりまするて。

喜兵 イヤモ、それも全く御主人、師直公の御發明と申し、御威勢によつて我れくに至るまで、斯く

活計歡樂に年月を送ると申すものぢや。見さつしやれ、我が君に敵對いたせば、鹽治どのや

うに、家國をも失ひ、家中の者ども、散りぐと罷りなるて。左様な狼狽へた主人へ、仕官いた

すもこれ因縁。それを思へば、冥加至極の身の上ではないか。

尾扇 左様でござりまするて。

トこれを聞いてお袖、無念なこなし。菫をかむりし庄三郎も、顔を上けて同じく思ひ入れ。矢張り右

の鳴り物にて、向うより直助、藤八、二人とも藤八五文の藥賣りにて、呼びながら出て來り、花道に

て

藤八 カウ直助、てめえ今日は本郷から板橋の方を流すと云つたぢやアねえか。なぜ爰を流すのだ。

直助 サア、おれも少つと此方に用があるから、斯う向けて來たのよ。

藤八 コレ隠すな、知つてゐるぜ。てめえこの頃ぢやア山の女にかつて、賣り溜も親方の方へ遣らね

えさうだが、そんな事があつちやア、外の賣り子へも外聞が悪いぜ。

直助 ナニサ、わッちやア跡月から、大山道者を當てに、川崎の方まで流して行つたワ。その賣り溜を、谷中の方まで持つて行かれるものか。いつか一度は持つてゆくわな。

藤八 おつう根締めをきめてゐるな。きめると云へば、大三ッで一合きめようぢやねえか。

直助 そいつもよからう。

藤八 サア〜。行くべえ〜……藤八五文。

直助 奇妙。

ト呼びながら二人は舞臺へ来る。お政見て

まさ 一服のんでおいでな。

直助 アイ〜。

桃助 オイ〜、一つくんな。

直助 ハイ〜。

石藏 オイ〜、爰へも一つくんな。

藤八 ハイ〜。

石藏 カウ、こりやア何にきくの。

藤八 第一、癪のつかへ、頭痛眩暈。

直助 腎精を増し、脾胃を補ふ。岡村藤八、オランダの傳法でござります。

文嘉 そいつア耳寄りだね。おれにも一つくんな。

直助 ハイ〜。

彦兵 わしも求めようかな。

藤八 ハイ〜。

藤助 これは有り難うござります。

まさ 掛けておいでな。

直助 今日は大分お取込みでござりますから、お紋さんの見世で一服やりやせう。

藤八 又びりにかゝりやアがる。そんならおらア、大三ッで待つてゐるぜ。

直助 氣前を見せて、いゝのを二合半とくらはせやな。

藤八 そんなら早く來さつし。待つてゐるぜ。

直助 アイサ、今に行くワ。

ト藤八、呼びながら下座へ入る。直助、楊枝見世の方へ来て

お袖さん。お前昨日から見世へ出たさうだの。

そでそれいなア、爰のお紋さんに頼まれて、それでわたしが名も、矢張りお紋というて、昨日からの見世へ。

直助 ア、さうかえ。そんなら藤八お紋奇妙、遁がね仲だ。マア、一服やらかしやせう、一つお貸し。

ト楊枝見世に腰をかける。

そでサア、のましやんせ。

ト行火を出してやる。神樂になり、向うより宅悦、按摩の拵へにて出て来て、すぐに舞臺へ来て

宅悦 おかみさん、今日はお賑やかでござりますね。

まさ オヤ／＼宅悦さん、先刻からぬしが待つてお出でだよ。

文嘉 時に按摩さん、おつりきな奴があるなら、ちよつびり行きてえの。

彦兵 此方にも格好な代物を、一ト切り頼みますぞや。

宅悦 好いのがござりますとも。わしの所は、按摩と灸を据ゑるが商賣、その片手業に致しますから、お出でなさいまして、年増が圍ひたければ大をする。中年増は中、娘は小をする。又グツと

大年増は、袋文をするてくれろと仰しやりますれば、そのつもりで呼びにやります。

文嘉 成る程、そいつは奇妙。

ト手を打つ。

直助 御用かね。

文嘉 ナニサ、内證の話しよ。どうでおいらは大にしよう。

彦兵 此方は小にしてほしい。

宅悦 まづ見てからの御相談になされませ。

ト桃助、この話を聞き

桃助 カウ、按摩さん、お前の所では地獄をするのか。

石藏 そんならおいらも買ひに行くぜ。

桃助 道理で又がそんな話をしたツけ。するい坊主だぜ。

宅悦 どう致しまして、わしが宅で其やうな事を……尤も灸點の看板は、女が閻魔へ灸をするてゐる看板ゆる、そこでお客方が、地獄へ行かう／＼と仰しやりますて。一月を十日づゝに仕切つて、一分二朱ぐらるでお出でなさるゝを、これを十日づゝ地獄と申して、割は別してお得用でござります

す。また大の方がお好きなら、熱い事は焦熱地獄、取分け大などは、ようきゝまするて。

文嘉 そんなら、ちよつと据ゑてもらはう。

彦兵 わしも腰の軽くなるやうに、焼いて來ようか。

文嘉 そんならかみさん、歸りに寄りやす。

まさ お待ち申しますぞえ。

宅悦 サア、御案内いたしませう。

桃助 何でも彼奴が内で、えてをするにやアちけえねえ。

石藏 行つてごだつてやるべい。

桃助 サア、來やく。

ト二人は宅悦の跡を追つて下座へ入る。

喜兵 さてく、何を申すやら、一えん解らぬ事どもばかりぢや。

尾扇 イヤモウ、がさつな儀でござります。

まさ ほんに私しと致しました事が、御新造様から、お楊枝をおことづかり申して參つたに、とんと打

ち忘れましてござりました。幸ひあれにござりまするが、どのやうなのが宜しうござりまするか。お慰みにあなた、御覽遊ばしませぬか。

うめ 女子どもへ土産に、調べて遣はしませうか。

喜兵 オ、さうしやれく。おのしも參つて見てやりやれサ。

ト皆々楊枝見世へ來て

まさ お土産は斯様いたしませう……福に羽根楊枝と房楊枝と……御覽遊ばせ。江戸香と申しまする齒

磨にも、矢張り御最眞の成出屋の似顔が描いてござりまする。

うめ 尾扇さん、お前も、齒磨などお取りなさんせぬかいなア。

尾扇 イヤ、愚老は少と心願の儀がござつて、楊枝齒磨ならば斷ち物でござる。あなたのお土産に

は、あれ、あそこにござる役者の紋所を描きましたのは、どうでござりまする。大方、梅幸か、

三升なぞが御意に入りましたらうな。

まさ ほんに、其やうなのが宜しうござりませう。

喜兵 何にせい、コレ女子、いろく取揃へて、これへ出しやれく。

尾扇 サ、早く御覽に入れさつしやい。

トこのうちお袖、知らぬ顔をしてゐる。
 喜兵 この女めも何をウツカリ致して居るぞ。早く出さぬかく。
 直助 申し、あなた方は、たしか高野の御家中でござりまするな。
 喜兵 ハテ、この女も、商賣は致さず、異な事を訊く女子ではある。いかにも師直公の藩中ぢやが。
 直助 サア、それなれば賣られぬゆゑ。
 喜兵 高野の家中へ賣られぬとは、そりや又なげ。
 直助 あまり御威勢が強いゆゑ、お求めなされたその上で、御意に入らぬその時は、又どのやうなお崇

りを、受けまいものでもないゆゑに、それでどうも賣られませぬわいな。
 尾扇 ハ、ア、さては鹽治浪人の身寄りの者と見ゆる。エ、賣らぬと申さば買ふまいワ。軒を並べて
 いくらもあるわサ。
 直助 外でお求めなされませ。

尾扇 それをおのしに習はうか。こいつ出過ぎた女めでござりまするわえ。

ト直助、中へ入り

直助 コレサ、どうしたものだ、そんなに愛嬌のねえ……イエ旦那、これは斯うでござりまする。この

娘は昨日から、この見世へ雇はれて、代りに出ました者ゆゑ、楊枝の値段も、ろくろく存じませぬゆゑ、それで只今のやうに申し上げたのでござります。必ずお氣にさへられて下さりますな。

尾扇 イヤ、ノ、罷りならぬ。條りと申せば失禮な奴だ。

直助 そこをどうぞ、御堪忍なされて遣はされませ。

尾扇 なんのいらざる底ひ立て。われもよく五文と出る奴だ。

喜兵 ハテ、打つちやつて置きめされ。たとひ鹽治浪人が、どれほど御主人を恨まうとも、當時足利家
 にても格別のお扱ひにて、新地御拜領なされてお屋敷替へ。御威勢強きあなたに對し、扶持方離
 れた素浪入ども、いらざる我慢も貧からと、イヤハヤ、馬鹿な女ではあるて。

トこれを聞いて、庄三郎も無念の思ひ入れ。

尾扇 おのれ、屋敷へ連れゆく奴なれども、今日は其まゝにさしおくぞ。

まき 折角の御参詣、もうあなたにも、御料簡なされて遣はされませ。

喜兵 よしない事に参詣の妨げ、サ、來やれ。

直助 これは大きに有り難うござりまする。

ト大拍子になり、喜兵衛先きに、お梅、お横、尾扇に中間附いて下座へ入る。

カウ、お袖さん、坊主が憎けりや袈裟までと、お前の云ふのも尤もだが、あゝ云つて見た時にやア、まぐに敵へ氣取られるわな。併し、斯ういふわしも、以前はお前の親御、四谷左門様とは同じ家中の、奥田將監が下郎の直助。御短慮とはいひながら、御家中は皆ちりぐ。わづか小者のわしまでも、藤八五文の藥賣り。おれはまだしも、左門様のお娘御が、今では楊枝見世の雇ひ女、これも時世と諦めて、負しい暮らしもともぐに。

そで かけも構はぬ小者の其方、それ程までに、この身を思うて。

直助 思うてどころか、屋敷にゐるその時から、附けて廻しつしてゐた事、まんざらお前も忘れはしまい。色になりと、女房になりと、なつてくれる氣はねえか。

ト云ひながら、お袖に寄り添ふ。お袖ムツとして

そで 以前其方は下郎の直助、わたしが父さん左門様と、將監様は同じ格式。その小者の軽い身であるながら、浪人したと見くびつて、わたしを捕へてアタ嫌らしい。聞く耳は持たぬわいなア。

直助 何だ、軽い重いのと、燈籠佛様へ願がけをしやアしめえし。元は小者にもしろよ、運が向きやア賣樂うりでも、二十や三十の元手はコレ、妾にも持つてゐるサ。お前がウンとさへ云へば、おれも又、三度飛脚へ狐の附いたやうな形をして歩きもしねえワ。なんぞおつりきな商賣を見附

けて、お前だつてこんな所へ出しやアしねえ。どうだく。

ト云ひながら、しなだれる。お袖立つて

そで たとへ有徳に暮らさうとも、嫌な人には片時も。

直助 お前まだ屋敷氣質がやまねえの。それぢやアおれに恥をかゝせるやうなものだ。お袖さん、どういふものだ。

そで エ、モ、知らぬわいなア。

ト振り放し、下座へ入る。直助跡を見送り

直助 あんなに又強情な女もねえものだ。口が酸くなつた。

ト茶見世の方へ来て

一杯おくれ。

まさ アイ……カウ藤八さん、今聞けばお前の名は、直助さんといふさうなが、どつちが本當の名だえ。直助 なにサ、藤八といふなア、この藥を賣る親方の名で、おれが名は直助サ。まさ さうかえ。さうして先刻から聞いてりやア、あの子を口説いてゐるが、誠に馬鹿くしい。なんの、あんなのに口をすほめる事があるものかな。あの子はあゝ見えても、エテに出るわな。

トお政へ錢四百文を渡す。

まさ これぢやア多いわな。

直助 剩りやア茶代よ……小僧や、早く持つて行つてくれよ。

升太 そんなら錢は爰から取るのだな。

まさ ア、しつこい、早く行きな。番頭さんへ云ひつけるによ。

升太 云ひ附けたら、味噌を買ひに来て、まけてやりやアしねえ。

まさ サア持つて行きな。

ト錢を數へてやる。

升太 そんなら行つて来よう……大三ッはよろしうござい。

ト呼びながら下座へ入る。

直助 イマくしい餓鬼だ。ドレ、おれも出直して来よう……ほんに、これも遣つておかう。

ト懐から二朱一つ出してお政に渡し

うまく頼んだ、あほりが肝腎だよ。

まさ そこに如才があるものかな。阿母アを手なづけて

直助 どうか今夜で病みつかせ

まさ 色にするとも、女房にするとも

直助 奇妙。ドレ、行つて来ようか。

ト直助下座へ入る。お政跡を見送り

まさ 直さん、早く来なよ。成る程、口はきいて見やうものだ。酒の尻尾と、引手で三百、下駄でも買

はうか。イヤ、矢ッ張り米屋へ入れておかう。ドレ、行つて来ようか。

ト下座へ入る。双盤になり、向うより、つぶ六、泥太、非人のなり。願鐘、乞食坊主の形にて、左門、浪人者の親仁、編笠を持ち、皆々に引摺られ出て来る。少し跡より伊右衛門、黒羽織、大小、浪人の拵へにて出てくる。非人皆々花道にて

一同 サア、来やアがれ。

つぶ 太え親仁だ。此奴がほんの、乞食の上前取りといふのだ。

一同 何でも引摺つて行け。

ト皆々、左門を捕まへて舞臺へ来る。

つぶ コレ、わりやアどこの奴か知らねえが、おいらが仲間にも、渡り引きのあるものだワ。

泥太 われも只のぐれぢやアあるめえ。い、年をしやアがつて、馬鹿な野郎ぢやアねえか。
願鐵 青天井に草むしろ。一年中の寢所は、行きあたりバツタリ、蟋蟀にも附合ひがあるワ。
づぶ まして土一升米一掴み、御繁昌の御地内で、敷石の上の住居だワ。サア、誰れに渡つて地内で貰つたのだ。

願鐵 何も云ふ事はねえ。頭の所へしよびいて行け。

一同 それがいゝゝ。

ト一同寄つて左門をこづく。

左門 おてまへ達の仲間に、左様な作法のあると申す事も存せず、この所にて物貰ひ致し居つたは、身が不念、何分にも容赦おしやれ。

泥太 ナニ容赦しろ。容赦しろで済むものか。サア、われが貰ひ溜めを、爰へ出せ。

左門 イヤ、往來の合力受けうと存じたのみ、未だ一錢も手取りは致さぬ。

づぶ こんな奴を打ッちやつておくと、仲間のきまりが悪いワ。

願鐵 見せしめの爲に、着物も何もふん剥いて

泥太 筋骨を抜いてやれ。

一同 それがいゝゝ。

ト皆々寄つてたかつて左門を打擲する。伊右衛門の中へ入り、四人を隔て、左門を圍ふ。其うち下座より喜兵衛、お梅、お横、尾扇、出て窺ふ。

伊右 イヤゝゝ、ちと待ちやれ。

ト伊右衛門と顔見合せて

左門 ヤ、こなたは

トちよつと思ひ入れ。

づぶ モシゝゝ、あなた、知る人かは存じませぬが、わし等が渡世の邪魔をするこの親仁を、なんで留め立てなさるのだえ。

泥太 仲間の法を破られては

願鐵 おいら達の世渡りが出来やせぬワ。

づぶ 知る人でも構ふ事アねえ。

一同 ふん剥け。

ト騒いで立ちかゝる。

伊右 マア、待ちやれ。身共も敢へて知る人と申すではなけれども……それ、身共今日は
ちと志あつて、當觀世音へ參詣の道すがら、詳しい様子は存せねども、何か老人を捕へて手籠
めに致す様子。勿論、當人にも心得違ひと存じ居らるればこそ、手出しもえ、致されぬと相見の
る。然らばこれにて理非は解り居るやうなもの。老體のお人、見る目も氣の毒に存するゆゑ、此
お人になり代り、武士たる者が其方どもへ對して、詫びを致すほどに、此まゝに勘辨いたしては
くれまいか。

大南北全集

づぶ ナニ勘辨しろえ。なんほお侍ひ様でも、乞食の法は御存じありやすまい。糞ひ溜めを出させた上、
身ぐるみ脱がせて持つて行かにはやア、仲間の法が立ちやせぬワ。

伊右 成る程、左様な儀もあらうて。然らば斯様いたさう。これに少々金子貯へ致し居る間、その詫び
代と致し、遣はすほどに、此まゝに料簡いたしくりやれ。

ト鼻紙入れより一朱を四つ出してやる。左門見て

左門 イヤ、その金子借り受けては

伊右 ハテ何事もこの場は拙者に

ト思ひ入れ。

づぶ ヤア、この旦那から一朱で四つ

一同 それは有り難うござります。

泥太 身ぐるみ剃いでも、一本が物は無えところへ、あなたがお出でなすつたばかり、親仁にも仕合
せ。此方も仕合せ。

づぶ 外の奴らの來ぬうちに

願鐵 辨天山で一杯やらうか。

一同 それがいゝゝ。エ、有り難うござります。

ト皆々下座へ入る。左門あたりを見廻し、思ひ入れあつて

左門 御覽の通り、尾羽うち枯らす今の身の上、御深切、千萬番う存する。只今の恩借は、明日屹度
返却いたすでござらう。

ト云ひ捨てたまゝ行きかける。伊右衛門は杖を叩へ思ひ入れ。

伊右 マ、ちとお待ち下され。

ト合ひ方、風の音になり、伊右衛門手をつかへ

これはあなたのお詞とも存じませぬ。舅は親なり、聲は悴。たとへお岩と別れ居つたとて、あな

東海道四谷怪談

たは正しく實の親。

左門 サア、それゆゑにこそ今の金子、借りともなう存するゑ。

伊右 そりや又何ゆる。

左門 一日、聲舅の縁組みは致したなれども、最早娘のお岩も、此方へ引取るからは、聲でもなく、舅でもござらぬゆる。

伊右 左門様、なぜ又お岩を返しては下さりませぬ。互ひに飽きも飽かれもせぬ仲、殊にはこの程、懐妊いたし、子まで儲けし二人が仲。何があなたのお氣に入らいで

左門 そりや御自分の心に問はッしやれ。尤も娘お岩めも、不所存にてころび合ひ、親の許さぬ夫婦仲。畢竟、遣らう、貰はうと、キツとした仲立ちはなけれども、そりやこの道ばかりは別なものと、その儘に捨ておいたが、氣にはさええられな、聲のこなたの根性が、おれの氣に入らぬ。

伊右 ヤア。

左門 とサア、申す譯は、未だ御主人御繁昌の砌り、お國許にて御用金紛失。その預かりは早野勘平が親三太夫、越度と相なり、切腹いたして相果てた。その盗人もこの左門、よツク存じて罷りあれど、その論議中にお家の騒動、それゆるたうとそれなり、胸に包んで何事も、云はずにゐるは

身が情、それゆる娘は添はされぬ。

伊右 黙らッしやい、左門どの。いま其許は、聲でもなく舅でもないとお云やつたぞよ。すりや赤の他人でござるぞよ。赤の他人の伊右衛門に向つて、ヅカ〜と物云はッしやるが、して又何ぞ手前が盗んだと申す、證據でもござるのかえ。

左門 ハ、ハ、ハ、ハ、證據呼はりさつしやるは、自分の悪事を、自分の口から白狀いたすやうなもの。その以前娘の所へ、結納の帯代にと、贈られたるその金子は、一兩々々お家の極印。

伊右 ヤア。

左門 それも云はぬが舅の寸志。その儘にして戻した事、貴公覺えがござらうがな。

伊右 イヤ、あの金は配分金。

左門 云はッしやるな。まだ騒動にならぬ前、なんで配分おしやつた。

伊右 サアそりやア。

左門 跡先き揃はぬ詞の端。それゆる娘はえ、添はせぬ。

伊右 すりや、どうあつても

左門 今の恩借はきツと返す。お岩を返す事は罷りならぬ。

伊右 ならずばいッ。畢竟勇と思ふゆゑ、詞を盡し、手を下けて、持ち上げればつけ上がり、往來

の人に合力受け、食ふ事もならねえ分際で、心が違ふの、氣に入らぬのと、瘦せ我慢も貧乏から、

賁いでやらうと存じたに。身のほど知らぬ老ほれめ。

左門 身に錦繡をまとふとも、不義の富貴は望みにないッ。

伊右 なんと。

左門 どりや、歸宅いたさうか。

伊右 この身の悪事を氣取つた左門、露顯いたさば後日の妨げ。最早生けては……跡追つかけて。さうだ。

ト早めたる双盤になり、伊右衛門、跡追ひかけて向うへ入る。喜兵衛みなく、山門の中より出て、跡を見送り

喜兵 今のは慥か鹽治浪人。併し今一人のあの若者、古主の鹽治を思はぬ様子。さすればどうぞ此方へ

引き込み、御主人へ推舉なし、何かの様子を、糺さするには最屈竟。

まさき お梅様の御病氣も

尾扇種は矢ッ張りあの侍ひ。

うめ ほんに床しい

喜兵 ヤ。

ト思ひ入れ。お梅恥かしきこなし。この前より、寝てゐたる庄三郎起き上がり、喜兵衛の前へ出て

庄三 御報謝お願ひ申します。

ト面桶を出す。

喜兵 物詣りの歸るさ。手の内を遣はせ。

中間 ソレ、取らせろぞ。

ト錢を出して取らせる。

庄三 ハイ、有り難うござります。御大身の旦那様、ますます御繁昌で、その上おめでたい事だらけで

ござります。

喜兵 何がめでたい。

庄三 最前、よそながらちよつと承りますれば、あなたのお主様は、お屋敷替へでござりますと承

りましたが、定めしお住居のよい所でござりませう。いづれの邊へお屋敷替へでござりまする。

喜兵 ハテ、非人のくせに、それ聞いてどうする。身が主人を、何人と存じて居る。

庄三 エ……サア、どなた様やら、そこは存じませぬが、あまり御出世のおめでたさ。むさくろしい非人でも、せめてあなた方のお名でも承りますれば、私しが身の守りにでもなりませうと存じまして

喜兵 イカサマ、主人の御出世を、それほどにめでたいと喜ぶなら、非人とても萬更憎うはない。云つて聞かさう。手前が主人は、當時出頭第一の、高野師直様、この度のお屋敷替へは、鎌倉花水橋の向う河岸の、葛飾臺と申す所に、新地を下され、新たに御屋敷が建つ。さて家老用人は申すに及ばず、中間下々に至るまでも御加増あつて、イヤモ殊の外のお物入り。なんと御威勢は、ひどいものであらうがな。

庄三 エ、すりやお屋敷は花水橋の向う、葛飾臺へ新しく……そこがお上屋敷でござりまするな。喜兵 オ、サ、即ちそこがお上屋敷と定まるのサ。

トウか、話してゐる。庄三郎、いろ／＼に口惜しき思ひ入れあつて、持つてゐたる面桶の錢を、喜兵衛に見えぬやうにあたりへ捨てる。尾扇 これを見附けて

尾扇 ヤイ、このドウを食め。折角旦那が合力なされた錢を、なんでおのれ捨てたのだ。冥加を知らぬ罰あたりめ。

庄三 どう致して私しが

尾扇 でも、たつた今、愚老が見て居つた。

喜兵 何ぢや、合力した錢を捨てた。ハ、ア解つた。道理こそ詳しく屋敷の様子をねらひ出すと思つたが、察するところ鹽治浪人。非人になつて御主人を、附け覗つても及ばぬ事だワ。

尾扇 左様々々。いらざる非人が齒向ひ立て。屋敷へ引ッ立て、拷問して、一味の奴らを白状させうか。トかゝる。庄三郎ちよつと立廻りあつて、見事に投げる。

喜兵 ヤア、非人に似合はぬその手の内。ト刀を抜きかけるを、庄三郎、面桶で留めて

庄三 イヤ、私も腹からの非人でもござりませぬ、小さい時から角力好き、少つとづ、やつたら、小力のあるのが身の病。喧嘩より親の勘當。せう事なしに非人をして、生きてゐたいが即ち人情、それを滅多にお侍ひ、瓜や西瓜ぢやあるまいし、滅多に切られぢやありません。

ト振りほどいて立廻りのうち、庄三郎、懐中から廻文を落す。尾扇、手早く取り上げ
尾扇 「廻文状」……さてこそ一味の
庄三 南無三、それを

ト驚いて寄るを突き退け、尾扇は廻文を持つて花道へ駆け出す。庄三郎、追ひかけて行かうとするを、喜兵衛とめる。この時向うより小間物屋の與七、實は佐藤與茂七、小間物屋の荷を擔ぎ出て来て、尾扇の持つたる廻文を引つたり、懐へ入れ、舞臺へ来る。尾扇、追っかけ歸り

尾扇 ヤイ町人め、今の品を

庄三 ヤア、こなたは佐藤

與茂 エ、この狂人を食が何を云ふやら。ハ、ハ、ハ、ハ、……モシ、旦那方、この非人は何を無禮

致したかは存じませぬが、この邊にまごついてゐまする、ありやア宿なしの狂人。狂人を捕へ、理屈を仰しやるは、不狂人の同じく狂ふ世の譬へ。何事も、御勘辨なされて遣はされませ。

喜兵 イヤ、狂人と申すは、其方が扱ひの嘘と申す者。身共が主人の名を聞いて、屋敷の所替へまで、覗ひ出したこの非人、鹽治浪人に相違ない。それゆゑ身共が

與茂 すりや、あなた方には

尾扇 師直公の御家老、伊藤喜兵衛様だワ。

與茂 ハ、ア、それゆゑ爰にて

ト思ひ入れ。

中間 鹽治の浪人、屋敷へ引ツ立て、拷問するワ。

與茂 これは又、怪しからぬ事を承はりまする。この乞食は、いつもく他愛ない事を申しまする狂人。なんの鹽治浪人でござりませう。よし又浪人にしたところが、なんでお屋敷へ引ツ立て、拷問をなされます。但しお上からお觸れでもござりましたかな。

喜兵 ヤア。

與茂 なんほお家は斷絶でも、その家來の浪人まで、引ツ捕へて根葉を斷やさうといふやうな科もござりますまい。なんと、そんなものぢやアござりませぬか。

喜兵 ムウ。

ト詰まる。

尾扇 それはそれにしてもやらうが、いま愚老が持つて驅け出した物を、なぜ途中で引ツたくつた。

與茂 あなたの持つてお出でなされた物とは、これでござりますか。

ト懷中より三つ折にした鼻紙を出して見せ

私しも龜相な。あなたが薬の引き札を配つてお出でなされたと存じまして取りました。これは大きに龜相、眞平御免下さりませ。サア、お返し申します。